食魔

岡本かの子

菊萵苣（きくぢさ）と和名はついているが、原名のアンディーヴと呼ぶ方が食通の間には通りがよいようである。その蔬菜（そさい）が姉娘のお千代の手で水洗いされ笊（ざる）で水を切って部屋のまん中の台俎板（だいまないた）の上に置かれた。

素人の家にしては道具万端整っている料理部屋である。ただ少し手狭なようだ。

若い料理教師の鼈四郎（べつしろう）は椅子（いす）に踏み反り返り煙草（たばこ）の手を止めて戸外の物音を聞き澄ましている。外では初冬の風が町の雑音を吹き靡（なび）けている。それは都会の木枯しとでもいえそうな賑（にぎや）かで寂しい音だ。

妹娘のお絹はこどものように、姉のあとについて

一々、姉のすることを覗(のぞ)いて来たが、今は台俎板の傍に立って笊の中の蔬菜を見入る。蔬菜は小柄で、ちょうど白菜を中指の丈けあまりに縮めた形である。しかし胴の肥(ふと)り方の可憐(かれん)で、貴重品の感じがするところは、譬(たと)えば蕗(ふき)の薹(とう)といったような、草の芽株に属するたちの品かともおもえる。

笊の目から滑(した)った蔬菜の雫(しずく)が、まだ新しい台俎板の面に濡木(ぬれぎ)の肌の地図を浸み拡(ひろ)げて行く勢いも鈍って来た。その間に、棚や、戸棚や抽出(ひきだ)しから、調理に使いそうな道具と、薬味容(やくみい)れを、おずおず運び出しては台俎板の上に並べていたお千代は、並び終えても動か

ない料理教師の姿に少し不安になった。自分よりは教師に容易く口の利ける妹に、用意万端整ったことを教師に告げよと、目まぜをする。妹は知らん顔をしている。

若い料理教師は、煙草の喫（す）い殻を屑籠（くずかご）の中に投げ込み立上って来た。じろりと台俎板の上を見亙（みわた）す。これはいらんという道具を二三品、抽（ぬ）き出して台俎板の向う側へ黙って抛（ほう）り出した。

それから、笊の蔬菜を白磁の鉢の中に移した。わざと肩肘（かたひじ）を張るのではないかと思えるほどの横柄な所作は、また荒っぽく無雑作に見えた。教師は左の手で一

つの匙（さじ）を、鉢の蔬菜の上へ控えた。塩と胡椒（こしょう）と辛子（からし）を入れる。酢を入れる。そうしてから右の手で取上げたフォークの尖（さき）で匙の酢を搔（か）き混ぜる段になると、急に神経質な様子を見せた。狭い匙の中でフォークの尖はミシン機械のように動く。それは卑劣と思えるほど小器用で脇（わき）の下がこそばゆくなる。酢の面に縮緬皺（ちりめんじわ）のようなさざなみか果てしもなく立つ。

妹娘のお絹は彼の矛盾にくすりと笑った。鼈四郎は手の働きは止めず眼だけ横眼にじろりと睨（にら）んだ。

姉娘の方が肝が冷えた。

匙の酢は鉢の蔬菜の上へ万遍（まんべん）なく撒（ま）き注がれた。

若い料理教師は、再び鉢の上へ銀の匙を横へ、今度はオレフ油を罎（びん）から注いだ。

「酢の一に対して、油は三の割合」

厳かな宣告のようにこういい放ち、匙で三杯、オレフ油を蔬菜の上に撒き注ぐときには、教師は再び横柄で、無雑作で、冷淡な態度を採上げていた。

およそ和（あ）えものの和え方は、女の化粧と同じで、できるだけ生地（きじ）の新鮮味を損（そこな）わないようにしなければならぬ。掻き交ぜ過ぎた和えものはお白粉（しろい）を塗りたくった顔と同じで気韻（きいん）は生動しない。

「揚ものの衣の粉の掻き交ぜ方だって同じことだ」

こんな意味のことを喋（しゃべ）った鼈四郎は、自分のいったことを立証するように、鉢の中の蔬菜を大ざっぱに掻き交ぜた。それでいて蔬菜が底の方からむらなく攪乱（かくらん）されるさまはやはり手馴（てな）れの技倆（ぎりょう）らしかった。

アンディーヴの戻茎の群れは白磁の鉢の中に在って油の照りが行亙り、硝子（ガラス）越しの日ざしを鋭く撥（は）ね上げた。

蔬菜の浅黄いろを眼に染（し）ませるように香辛入りの酢が匂（にお）う。それは初冬ながら、もはや早春が訪れでもしたような爽（さわや）かさであった。

鼈四郎は今度は匙をナイフに換えて、蔬菜の群れを

鉢の中のまま、ざっと截（き）り捌（さば）いた。程のよろしき部分の截片を覗（うかが）ってフォークでぐざと刺し取り、

「食って見給え」

と姉娘の前へ突き出した。その態度は物の味の試しを勧めるというより芝居でしれ者が脅（おど）しに突出す白刃に似ていた。

お千代はおどおどしてしまって胸をあとへ引き、妹へ譲り加減に妹の方へ顔をそ向けた。

「おや。――じゃ。さあ」

鼈四郎はフォークを妹娘の胸さきへ移した。

お絹は滑らかな頸（くび）の奥で、喉頭（こうとう）をこくりと動かした。

煙るような長い睫の間から瞳を凝らしてフォークに眼を遣り、瞳の焦点が截片に中ると同時に、小丸い指尖を出してアンディーヴを撮み取った。お絹の小隆い鼻の、種子の形をした鼻の穴が食慾で拡がった。

アンディーヴの截片はお絹の口の中で慎重に嚙み砕かれた。青酸い滋味が漿液となり嚥下される刹那に、あなやと心をうつろにするうまさがお絹の胸をときめかした。物憎いことには、あとの口腔に淡い苦味が二日月の影のようにほのかにとどまったことだ。この淡い苦味は、またさっき喰べた昼食の肉の味のしつこい記憶を軽く拭き消して、親しみ返せる想い出にした。

アンディーヴの截片はこの効果を起すと共に、それ自身、食べて食べた負担を感ぜしめないほど軟く口の中で尽きた。滓（かす）というほどのものも残らない。

「口惜しいけれど、おいしいわよ」

お絹は唾液（だえき）がにじんだ脣（くちびる）の角を手の甲でちょっと押えてこういった。

「うまかろう。だから食ものは食ってから、文句をいいなさいというのだ」

鼈四郎の小さい眼が得意そうに輝いた。

「ふだん人に難癖をつける娘も、僕の作った食もののうまさには一言も無いぜ。どうだ参ったか」

鼈四郎は追い討ちしていい放った。
お絹は両袖（りょうそで）を胸へ抱え上げてくるりと若い料理教師に背を向けながら、
「参ったことにしとくわ」
と笑い声で応けた。
ふだん言葉かたき同志の若い料理教師と、妹との間に、これ以上のうるさい口争いもなく、さればといって因縁を深めるような意地の張り合いもなく、あっさり済んでしまったのをみて、お千代はほっとした。安心するとこの姉にも試しに食べてみたい気持がこみ上げて来た。

「じゃ、あたしも一つ食べてみようかしら」

とよそ事のようにいいながらそっと指尖を鉢に送って小さい截片を一つ撮み取って食べる。

「あら、ほんとにおいしいのね」

眼を空にして、割烹衣（かっぽうい）の端で口を拭（ぬぐ）っているときお千代は少し顔を赧（あから）めた。お絹は姉の肩越しに、アンディーヴの鉢を覗き込んだが、

「鼈四郎さん、それ取っといてね、晩のご飯のとき食べるわ」

そういった。

巻煙草（まきたばこ）を取出していた鼈四郎（べっしろう）はこれを聞くと、煙草

を口に銜（くわ）えたまま鉢を摑（つか）み上げ臂（ひじ）を伸して屑箱（くずばこ）の中へあけてしまった。

「あらッ！」

「料理だって音楽的のものさ、同じうまみがそう晩までも続くものか、刹那（せつな）に充実し刹那に消える。そこに料理は最高の芸術だといえる性質があるのだ」

お絹は屑箱の中からまだ覗（のぞ）いているアンディーヴの早春の色を見遣（みや）りながら

「鼈四郎の意地悪る」

と口惜しそうにいった。「おとうさまにいいつけてやるから」と若い料理教師を睨（にら）んだ。お千代も黙って

はいられない気がして妹の肩へ手を置いて、お交際いに睨んだ。
　令嬢たちの四つの瞳を受けて、鼈四郎はさすがに眩しいらしく小さい眼をしばたたいて伏せた。態度はいよいよ傲慢に、肩肘張って口の煙草にマッチで火をつけてから
「そんなに食ってみたいのなら、晩に自分たちで作って食いなさい。それも今のものそっくりの模倣じゃいかんよ。何か自分の工風を加えて、――料理だって独創が肝心だ」
　まだ中に蔬菜が残っている紙袋をお絹の前の台俎板

へ抛り出した。

これといって学歴も無い素人出の料理教師が、なにかにつけて理窟を捏ね芸術家振りたがるのは片腹痛い。だがこの青年が身も魂も食ものに殉じていることは確だ。若い身空で女の襷をして漬物樽の糠加減を弄っている姿なぞは頼まれてもできる芸ではない。生れ附き飛び離れた食辛棒なのだろうか、それとも意趣があって懸命にこの本能に縋り通して行こうとしているのか。

お絹のこころに鼈四郎がいい捨てた言葉の切れ端が蘇って来る。「世は遷り人は代るが、人間の食意地

は変らない」「食ものぐらい正直なものはない、うまいかまずいかすぐ判る」「うまさということは神秘だ」――それは人間の他の本能とその対象物との間の魅力に就てもいえることなのだが、鼈四郎がいうとき特にこの一味だけがそれであるように受取らせる。ひょっとしたらこの青年は性情の片端者なのではあるまいか、他の性情や感覚や才能まで、その芽を捥ぎ取られ、いのちは止むなく食味の一方に育ち上った。鼈四郎が料理をしてみせるとき味利きということをしたことが無い。身体全体が舌の代表となっていて、料理の所作の順序、運び、拍子、そんなもののカン、から味の調不調

の結果がひとりでに見分けられるらしい。食慾だけ取立てられて人類の文化に寄与すべく運命付けられた畸形（きけい）な天才。天才は大概片端者だという。そういえばこの端麗な食青年にも愚かしいものの持つ美しさがあって、それが素焼の壺（つぼ）とも造花とも感じさせる。情慾が食気にだけ偏ってしまって普通の人情に及ぼさないためかしらん。

一ばん口数を利く妹娘のお絹がこんな考えに耽（ふけ）ってしまっていると、もはや三人の間には形の上の繋（つなが）りがなく、鼈四郎はしきりに煙草の煙を吹き上げては椅子（いす）に踏み反って行くだけ、姉娘のお千代は、居竦（いすく）ま

される辛(つら)さに堪えないというふうにこそこそ料理道具の後片付けをしている。一しきり風が窓硝子(まどガラス)に砂ほこりを吹き当てる音が極立(きわだ)つ。

「天才にしても」とお絹はひとり言のようにいった。

「男の癖にお料理がうまいなんて、ずいぶん下卑(げび)た天才だわよ」

と鼈四郎の顔を見ていった。

それから溜(たま)ったものを吐き出すように、続けさまに笑った。

鼈四郎はむっとしてお絹の方を見たが、こみ上げるものを飲み込んでしまったらしい。

「さあ、帰るかな」

としょんぼり立上ると、ストーヴの角に置いた帽子を取ると送りに立った姉娘に向い

「きょうは、おとうさんに会ってかないからよろしくって、いっといて呉れ給え」

といって御用聞きの出入り口から出て行った。

靴の裏と大地の堅さとの間に、さりさり砂ほこりが感じられる初冬の町を歩るいて鼈四郎は自宅へ帰りかかった。姉妹の娘に料理を教えに行く荒木家蛍雪館の

ある芝の愛宕台（あたごだい）と自宅のある京橋区の中橋広小路との間に相当の距離はあるのだが、彼は最寄（もより）の電車筋へも出ずゆっくり歩るいて行った。

一つは電車賃さえ倹約の身の上だが、急いで用も無い身体である。もう一つの理由はトンネル横町と呼ばれる変った巷路（こうろ）を通り度（た）いためでもある。

いずれは明治初期の早急な洋物輸入熱の名残りであろう。街の小道の上に煉瓦（れんが）積みのトンネルが幅広く架け渡され、その上は二階家のようにして住んでいるらしい。瓦屋根（かわらやね）の下の壁に切ってある横窓からはこどもの着ものなど、竹竿で干し出されているのをときどき

見受ける。

鼠色（ねずみいろ）の瓦屋根も、黄土色の壁も、トンネルの紅色の煉瓦も、燻（いぶ）されまた晒（さら）されて、すっかり原色を失い、これを舌の風味にしたなら裸麦で作った黒パンの感じだと鼈四郎はいつも思う。そしてこの性を抜いた豪華の空骸（なきがら）に向け、左右から両側になって取り付いている二階建の小さい長屋は、そのくすんだねばねばした感じから、鶫（つぐみ）の腸（わた）の塩辛のようにも思う。鼈四郎はわたりの風趣を強いて食味に翻訳して味わうとではないが、ここへ彼は来ると、裸麦の匂（にお）いや、鶫の腸にまで染（し）みている木の実の匂いがひとりでにした。佐久間町

の大銀杏（おおいちょう）が長屋を掠（かす）めて箒（ほうき）のように見える。

彼はこの横町に入り、トンネルを抜け横町が尽きて、やや広い通りに折れ曲るまでの間は自分の数奇の生立ちや、燃え盛る野心や、ままならぬ浮世や、癪（しゃく）に触る現在の境遇をしばし忘れて、靉靆（あいたい）とした気持になれた。それはこの上墜（お）ちようもない世の底に身を置く泰（やす）らかさと現実離れのした高貴性に魂を提げられる思いとが一つに中和していた。これを侘（わ）びとでもいうのかしらんと鼈四郎は考える。この巷路を通り抜ける間は、姿形に現れるほども彼は自分が素直な人間になっているのを意識するのであった。ならば振り戻って、もう一

度トンネルを潜(くぐ)ることによって、靉靆とした意識に浸り還(かえ)せるかというと、そうはゆかなかった。感銘は一度限りであった。引き返してトンネル横町を徘徊(はいかい)してもただ汚らしく和洋蕪雑(わようぶざつ)に混っている擬(まが)いものの感じのする街に過ぎなかった。それゆえ彼は、蛍雪館へ教えに通う往き来のどちらかにだけ日に一度通り過ぎた。

土橋を渡って、西仲通りに歩るきかかるとちらほら町には灯が入って来た。鼈四郎はそこから中橋広小路の自宅までの僅(わずか)な道程を不自然な曲り方をして歩るいた。表通りへ出てみたりまた横町へ折れ戻り、そして露路の中へ切れ込んだりした。彼が覗(のぞ)き込む要所要

所には必ず大小の食もの屋の店先があった。彼はそれ等の店先を通りかかりながら、店々が今宵（こよい）、どんな品を特品に用意して客を牽（ひ）き付けようとしているかを、じろりと見検めるのだった。

ある店では、紋のついた油障子の蔭から、赤い蟹（かに）や大粒の蛤（はまぐり）を表に見せていた。ある店では、ショウウインドーの中に、焼串（やきぐし）に鴫（しぎ）を刺して赤蕪（あかかぶ）や和蘭芹（オランダぜり）と一しょに皿に並べてあった。

「どこも、ここも、相変らず月並なものばかり仕込んでやがる。智慧（ちえ）のない奴等ばかりだ」

鼈四郎は、こう呟（つぶや）くと、歯痒（はがゆ）いような、また得意の

色があった。そしてもし自分ならば、——と胸で、季節の食品月令から意表で恰好(かっこう)の品々を物色してみるのだった。

彼の姿を見かけると、食もの屋の家の中から声がかけられるのであった。

「やあ、先生寄ってらっしゃい」

けれども、その挨拶(あいさつ)振りは義理か、通り一遍のものだった。どの店の人間も彼の当身(あてみ)の多い講釈には参らされていた。

「寄ってらっしゃいたって、僕が食うようなものはありやしまいじゃないか」

「そりゃどうせ、しがない垂簾（のれん）の食もの屋ですからねえ」

こんな応対で通り過ぎてしまう店先が多かった。無学を見透されまいと、嵩（かさ）にかかって人に立向う癖が彼についてしまっている。それはやがて敬遠される基と彼は知りながら自分でどうしようもなかった。彼は寂しく自宅へ近付いて行った。

表通りの呉服屋と畳表問屋の間の狭い露路の溝板へ足を踏みかけると、幽（かす）かな音で溝板の上に弾（は）ねている

こまかいものの気配いがする。暗くなった夜空を振り仰ぐと古帽子の鍔(つば)を外ずれてまたこまかいものが冷たく顔を撫(なで)る。「もう霰(あられ)が降るのか。」彼は一瞬の間に、伯母から令押被(おっかぶせ)の平凡な妻と小児を抱えて貧しく暮している現在の境遇の行体(ぎょうたい)が胸に泛(うか)び上った。いま二足三足の足の運びで、それを眼のあたりに見なければならない運命を思うと鼈四郎(べっしろう)は、うんざりするより憤怒(ふんぬ)の情が胸にこみ上げて来た。ふと蛍雪館の妹娘のお絹の姿が俤(おもかげ)に浮ぶ。いつも軽蔑(けいべつ)した顔をして冷淡につけつけものをいい、それでいて自分に肌目(きめ)のこまかい、しなやかで寂しくも調子の高い、文字では書け

ない若い詩を夢見させて呉れる不思議な存在なのだ。

「なんだって、自分はあんなに好きなお絹と一しょになり、好きな生活のできる富裕な邸宅に住めないのだろう。人間に好くという慾を植えつけて置きながら、その慾の欲しがるものを真っ直には与えない。誰だか知らないが、世界を慥えた奴はいやな奴だ」

その憤懣を抱いて敷居を跨ぐのだったから、家へ上って行くときの声は抉るような意地悪さを帯びていた。

「おい。ビール、取っといたか。忘れやしまいな」

こどもに向き合い、五燭の電灯の下で、こどもに

一箸（ひとはし）、自分が二箸というふうにして夕飯をしたためていた妻の逸子は、自分の口の中のものを見悟られまいとするように周章（あわて）て嚥（の）み下した。口を袖（そで）で押えて駆け出して来た。

「お帰りなさいまし。篤がお腹が減ったってあんまり泣くものですから、ご飯を食べさせていましたので、つい気がつきませんでして、済みません」

いいつつ奥歯と頬（ほお）の間に挟った嚥み残しのものを、口の奥で仕末している。

「ビールを取っといたかと訊（き）くんだ」

「はいはい」

逸子は、握り箸の篤を、そのまま斜に背中へ抛（ほう）り上げて負（おぶ）うと、霰の溝板を下駄で踏み鳴らして東仲通りの酒屋までビールを誂（あつら）えに行った。

もう一突きで、**カッ**となるか涙をぽろっと滴すかの悲惨な界の気持にまで追い込められた硬直の表情で、竈四郎はチャブ台の前に胡坐（あぐら）をかいた。チャブ台の上は少しばかりの皿小鉢が散らされ抛り置かれた飯茶碗（めしぢゃわん）から飯は傾いてこぼれている。五燭の灯の下にぽんやり照し出される憐（あわ）れな狼藉（ろうぜき）の有様は、何か動物が生命を繋（つな）ぐことのために僅（わず）かなものを必死と食い貪（むさぼ）る途中を闖入者（ちんにゅうしゃ）のために追い退けられた跡とも見える。

「浅間しい」
鼈四郎は吐くようにこういって腕組みをした。
この市隠荘はお絹等姉妹の父で漢学者の荒木蛍雪が、中橋の表通りに画帖や拓本を売る蛍雪館の店を開いていた時分に、店の家が狭いところから、斜向うのこの露路内に売家が出たのを幸、買取って手入れをし寝泊りしたものである。ちょっとした庭もあり、十二畳の本座敷なぞは唐木が使ってある床の間があって瀟洒としている。蛍雪はその後、漢和の辞典なぞ作ったものが当り、利殖の才もあってだんだん富裕になった。表通りの店は人に譲り邸宅を芝の愛宕山の見晴しの台

に普請し、蛍雪館の名もその方へ持って行った。露路内の市隠荘はしばらく戸を閉めたままであったのを、鼈四郎が蛍雪に取入り、荒木家の抱えのようになったので、蛍雪は鼈四郎にこの市隠荘を月々僅な生活費を添えて貸与えた。但し条件附であった。掃除をよくすること、本座敷は滅多に使わぬこと——。それゆえ、鼈四郎夫妻は次の間の六畳を常の住いに宛(あ)てているのであった。一昨年の秋、夫妻にこどもが生れると蛍雪は家が汚れるといって嫌な顔をした。

「ちっとばかりの宛がい扶持(ぶち)で、勝手な熱を吹く。いずれ一泡吹かしてやらなきゃ」

それかといって、急にさしたる工夫もない。そんなことを考えるほど眼の前をみじめなものに感じさすだけだった。
鼈四郎は舌打ちして、またもとのチャブ台へ首を振り向けた。懐手をして掌を宛てている胃拡張の胃が、鳩尾(みぞおち)のあたりでぐうぐうと鳴った。
「うちの奴等、何を食ってやがったんだろう」
浅い皿の上から甘藷(いも)の煮ころばしが飯粒をつけて転げ出している。
「なんだ、いもを食ってやがる。貧弱な奴等だ」
鼈四郎は、軽蔑し切った顔をしたけれども、ふだん

家族のものには廉価なものしか食べることを許さぬ彼は、家族が自分の掟（おきて）通りにしていることに、いくらか気を取直したらしい。

「ふ、ふ、ふ、いもをどんな煮方をして食ってやがるだろう。一つ試（ため）してみてやれ」

彼は甘藷についてる飯粒を振り払い、ぱくんと開いた口の中へ抛り込んだ。それは案外上手に煮えていた。

「こりゃ、うまいや、ばかにしとらい」

鼈四郎は、何ともいいようのない擽（くすぐ）ったいような顔をした。

霰を前髪のうしろに溜めて逸子が帰って来た。こど

もを支えない方の手で提げて来たビール罎(びん)を二本差出した。

「さし当ってこれだけ持って参りました。あとは小僧さんが届けて呉れるそうでございますわ」

　鼈四郎はつねづね妻にいい含めて置いた。一本のビールを飲もうとするときにはあとに三本の用意をせよ。かかる用意あってはじめて、自分は無制限と豪快の気持で、その一本を飲み干すことができる。一本を飲もうとするときに一本こっきりでは、その限数が気になり伸々した気持でその一本すら分量の価(ねう)打ちだけに飲み足らうことができない。結局損な飲ませ方なの

だ。罎詰（びんづめ）のビールなぞというものは腐るものではないから余計とって置いて差支えない。よろしく気持の上の後詰の分として余分の本数をとって置くべきであると。いま、逸子が酒屋へのビール注文の仕方は、鼈四郎のふだんのいい含めの旨に叶（かな）うものであった。

「よしよし」と鼈四郎はいった。

彼は妻に、本座敷へ彼の夕食の席を設ることを命じた。これは珍しいことだった。妻は

「もし、ひょっとして汚しちゃ、悪かございません?」

と一応念を押してみたが、良人（おっと）は眉（まゆ）をぴくりと動かしただけで返事をしなかった。この上機嫌を損じてはと、

逸子は子供を紐(ひも)で負い替え本座敷の支度にかかった。

畳の上には汚れ除(よ)けの渋紙が敷き詰めてある、屏風(びょうぶ)や長押(なげし)の額、床の置ものにまで塵除(ちりよ)けの布ぶくろが冠(かぶ)せてある。まるで座敷の中の調度が、住む自分等を異人種に取扱い、見られるのも触れられるのも冒瀆(ぼうとく)として、極力、防避を申合せてるようであった。こうしてから自分等に家を貸し与えた持主の蛍雪の非人情をまざまざ見せつけられるようで、逸子には憎々しかった。

彼女は復讐(ふくしゅう)の小気味よさを感じながらこれ等の覆いものを悉(ことごと)く剝(は)ぎ取った。子供の眼鼻に塵(ちり)の入らぬよう手拭(てぬぐい)を冠(かぶ)せといて座敷の中をざっと叩(はた)いたり掃い

たりした。何かしら今夜の良人（おっと）の気分を察するところがあって、電灯も五十燭（しょく）の球につけ替えた。明煌々（あかりこうこう）と照り輝く座敷の中に立ち、あたりを見廻（みまわ）すと、逸子も久振りに気も晴々となった。しかし臆（おく）し心の逸子はやはり家の持主に対して内証の隠事をしている気持が出て来て、永くは見廻していられなかった。彼女は座布団（ざぶとん）を置き、傍にビール罎（びん）を置くと次の茶の間に引下りそこで中断された母子の夕飯を食べ続けた。

この間台所で賑（にぎ）やかな物音を立て何か支度をしていた鼈四郎（べつしろう）は、襖（ふすま）を開けて陶器鍋（とうきなべ）のかかった焜炉（こんろ）を持ち出した。白いものの山型に盛られている壺（つぼ）と、茶色

の塊が入っている鉢と白いものの横っている皿と香のものと配置よろしき塗膳(ぬりぜん)を持出した。醤油注(しょうゆつ)ぎ、手塩皿、ちりれんげ、なぞの載っている盆を持出した。四度目にビールの栓抜(せんぬ)きとコップを、ちょうど士(さむらい)が座敷に入るとき片手で提げるような形式張った肘(ひじ)の張り方で持出すと、洋服の腰に巻いていた妙な覆い布を剝ぎ去って台所へ抛(ほう)り込んだ。襖を閉め切ると、座敷を歩み過し椽側(えんがわ)のところまで来て硝子障子(ガラスしょうじ)を明け放した。闇(やみ)の庭は電燭の光りに、小さな築山や池のおも影を薄肉彫刻のように浮出させ、その表を僅(わずか)な霰(あられ)が縦に掠(かす)めて落ちている。幸に風が無いので、寒いだけ室内の

焜炉の火も、火鉢の火も穏かだった。

彼は座布団の上に胡座（あぐら）を掻（か）くと、ビール罎に手をかけ、にこにこしながら壁越しに向っていった。

「おい、頼むから今夜は子供を泣かしなさんな」

彼は、ビールの最初のコップに口をつけこくこくこくと飲み干した。掌で唇の泡を拭（ぬぐ）い払うと、さも甘そうにうえーと噯気（おくび）を吐いた。その誇張した味い方は落語家の所作を真似（まね）をして遊んでいるようにも妻の逸子には壁越しに取れた。

彼は次に、焜炉にかけた陶器鍋の蓋（ふた）に手をかけ、やあっと掛声してその蓋を高く擡（もた）げた。大根の茹（ゆだ）った匂（にお）

いが、汁の煮出しの匂いと共に湯気を上げた。

「細工はりゅうりゅう、手並をごろうじろ」

と彼は抑揚をつけていったが、蓋の熱さに堪えなかったものと見え、ち、ちちちといって、蓋を急ぎ下に置いた様子も、逸子には壁越しに察せられた。

じかに置いたらしい蓋の雫(しずく)で、畳が損ぜられやしないか？　ひやりとした懸念を押しのけて、逸子におかしさがこみ上げた。彼女はくすりと笑った。世間からは傲慢(ごうまん)一方の人間に、また自分たち家族に対しては暴君(タイラント)の良人が、食物に係っているときだけ、温順(おとな)しく無邪気で子供のようでもある。何となくいじらしい気

持が湧（わ）くのを泣かさぬよう添寝をして寝かしつけている子供の上に被（かず）けた。彼女は子供のちゃんちゃんこと着ものの間に手をさし入れて子供を引寄せた。寝つきかかっている子供の身体は性なく軟かに、ほっこり温かだった。

　本座敷で鼈四郎は、大根料理を肴（さかな）にビールを飲み進んで行った。材料は、厨（くりや）で僅に見出した、しかも平凡な練馬大根一本に過ぎないのだが、彼はこれを一汁三菜の膳組（ぜんぐみ）に従って調理し、品附した。すなわち鱠（なます）には大根を卸しにし、煮物には大根を輪切にしたものを鰹節（かつおぶし）で煮てこれに宛（あ）てた。焼物皿には大根を小魚

の形に刻んで載せてあった。鍋は汁の代りになる。かくて一汁三菜の献立は彼に於て完（まっと）うしたつもりである。

彼には何か意固地（いこじ）なものがあった。富贍（ふせん）な食品にぶつかったときはひと種（いろ）で満足するが、貧寒な品にぶつかったときは形式美を欲した。彼は明治初期に文明開化の評論家であり、後に九代目団十郎のための劇作家となった桜痴居士（おうちこじ）福地源一郎の生活態度を聞知っていた。この旗本出で江戸っ子の作者は、極貧の中に在って客に食事を供するときには家の粗末な惣菜（そうざい）のものにしろ、これを必ず一汁三菜の膳組の様式に盛り整えた。

従って焼物には塩鮭（しおじゃけ）の切身なぞもしばしば使われたという。

彼は料理に関係する実話や逸話を、諸方の料理人に、例の高飛車な教え方をする間に、聞出して、いくつとなく耳学問に貯える。何かという場合にはその知識に加担を頼んで工夫し出した。彼は独創よりもどっちかというと記憶のよい人間だった。

彼は形式通り膳組されている膳を眺めながら、ビールの合の手に鍋の大根のちりを喰（た）べ進んで行った。この料理に就（つい）ても、彼には基礎の知識があった。これは西園寺陶庵公が好まれる食品だということであった。

彼は人伝（ひとづ）てにこの事を聞いたとき、政治家の傍、あれだけの趣味人である老公が、舌に於て最後に到り付く食味はそんな簡単なものであるのか。それは思いがけない気もしたが、しかし肯（うなず）かせるところのある思いがけなさでもあった。そして彼には、いわゆる偉い人が好んだという食品はぜひ自分も一度は味ってみようという念願があった。それは一方彼の英雄主義の現れであり、一方偉い人の探索でもあった。その人が好くという食品を味ってみて、その人がどんな人であるかを溯（さかのぼ）り知り当てることは、もっとも正直で容易い人物鑑識法のように彼には思えた。

鍋の煮出し汁は、兼（かね）て貯えの彼特製の野菜のエキスで調味されてあった。大根は初冬に入り肥えかかっていた。七つ八つの泡によって鍋底から浮上り漂う銀杏形（いちょうがた）の片（き）れの中で、ほど良しと思うものを彼は箸（はし）で選み上げた。手塩皿の溜醤（たまり）油に片れの一角を浸し熱さを吹いては喰べた。

生（き）で純で、自然の質そのものだけの持つ謙遜（けんそん）な滋味が片れを口の中へ入れる度びに脆（もろ）く柔く溶けた。大まかな菜根の匂いがする。それは案外、甘（あま）いものであった。

「成程なア」

彼は、感歎(かんたん)して独り言をいった。

彼は盛に煮上って来るのを、今度は立て続けに吹きもて食べた。それは食べるというよりは、吸い取るという恰好(かっこう)に近かった。土鼠が食い耽(ふけ)る飽くなき態があった。

その間、たまに彼は箸を、大根卸しの壺に差出したが、ついに煮大根の鉢にはつけなかった。

食い終って一通り堪能(たんのう)したと見え、彼は焜炉の口を閉じはじめて霰の庭を眺め遣(や)った。

あまり酒に強くない彼は胡座の左の膝(ひざ)に左の肘を突立て、もう上体をふらふらさしていた。曖気をしきり

に吐くのは、もはや景気附けではなく、胃拡張の胃壁の遅緩が、飲食したものの刺激に遭いうねり戻す本もののものだった。ときどき甘苦い粘塊が口中へ噎(む)せ上って来る。その中には大根の片れの生嚙(なまが)みのものも混っている。彼は食後には必ず、この噯気をやり、そして、人前をも憚(はばか)らず反芻(はんすう)する癖があった。壁越しに聞いている逸子は「また、始めた」と浅間しく思う。家庭の食後にそれをする父を見慣れて、こどもの篤が真似(まね)て仕方が無いからであった。

　噯気は不快だったが、その不快を克服するため、なおもビールを飲み煙草(たばこ)を喫(す)うところに、身体に非現実

な美しい不安が起る。「このとき、僕は、人並の気持になれるらしい。妻も子も可愛（かわい）がれる――」彼はこんなことを逸子によくいう。逸子は寝かしついた子供に布団を重ねて掛けてやりながら、「すると、そのとき以外は、良人に蛍雪が綽名（あだな）に付けたその鼈（すっぽん）のような動物の気持でいるのかしらん」と疑う。

鼈四郎は、煙草を喫いながら、彼のいう人並の気持になって、霞の庭を味っていた。時刻は夜に入り闇（やみ）の深まりも増したかに感ぜられる。庭の構いの板塀は見えないで、無限に地平に抜けている目途の闇が感じられる。小さな築山と木枝の茂みや、池と庭草は、電灯

の光は受けても薄板金で張ったり、針金で輪廓（りんかく）を取ったりした小さなセットにしか見えない。呑（の）むことだけして吐くことを知らない闇（やみ）。もし人間が、こんな怖（おそ）ろしい暗くて鈍感な無限の消化力のようなものに捉（とら）えられたとしたならどうだろう。泣いても喚（わめ）き叫んでも、追付かない、そして身体は毛氈苔（もうせんごけ）に粘られた小虫のように、徐々に溶かされて行く、溶かされるのを知りつつ、何と術もなく、じーじー鳴きながら捉えられている。永遠に——。鼈四郎（べつしろう）はときどき死ということを想（おも）い見ないことはない。彼が生み付けられた自分でも仕末に終えない激しいものを、せめて世間に理解して貰

おうと彼は世間にうち衝（つか）って行く。世間は他人（ひと）ごとどころではないと素気なく弾（は）ね返す。彼はいきり立ち武者振（むしゃぶ）りついて行く。気狂い染（じ）みているとて今度は体を更わされる。あの手この手。彼は世間から拒絶されて心身の髄に重苦しくてしかも薄痒（うすがゆ）い疼（うず）きが残るだけの性抜きに草臥（くたび）れ果てたとき、彼は死を想い見るのだった。それはすべてを清算して呉（く）れるものであった。想い見た死に身を横えるとき、自分の生を眺め返せば「あれは、まず、あれだけのもの」と、あっさり諦（あきら）められた。潔い苦笑が唇に泛（うか）べられた。かかる死を時せつ想い見ないで、なんで自分のような激しい人間が三

十に手の届く年齢にまでこの世に生き永らえて来られようぞと彼は思う。

生を顧みて「あれは、まず、あれだけのもの」と諦めさすところの彼の想い見た死はまた、生をそう想い諦めさすことによってそれ自らを至って性の軽いものにした。生が「あれは、まず、あれだけのもの」としたなら、死もまた「これは、まず、これだけのもの」に過ぎなかった。彼は衒学的な口を利くことを好むが、彼には深い思惟の素養も脳力も無い筈である。

これは全く押し詰められた体験の感じから来たもので、それだけにまた、動かぬものであった。彼は少青

年の頃まで、拓本の職工をしていたことがあるが、その拓本中に往々出て来る死生一如とか、人生一泡滓（ほうさい）とかいう文字をこの感じに於て解していた。それ故にこそ、とどのつまりは「うまいものでも食って」ということになった。世間に肩肘（かたひじ）張って暮すのも左様大儀な芝居でもなかった。

だが、今宵（こよい）の闇の深さ、粘っこさ、それはなかなか自分の感じ捉えた死などいう潔く諦めよいものとは違っていて、不思議な力に充（み）ちている。絶望の空虚と、残忍な愛とが一つになっていて、捉えたものは嘗（な）め溶し溶し尽きたら、また、原形に生み戻し、また嘗め溶

す作業を永遠に、繰返さでは満足しない執拗(しつよう)さを持っている。こんな力が世の中に在るのか。鼈四郎は、今迄、いろいろの食品を貪(むさぼ)り味ってみて、一つの食品というものには、意志と力があってかくなりわい出たもののように感じていた。押拡(おしひろ)げて食品以外の事物にも、何かの種類の意味で味いというものを帯びている以上、それがあるように思われている。だが、今宵の闇の味い！　これほど無窮無限と繰返しを象徴しているものは無かった。人間が虫の好く好物を食べても食べても食べ飽きた気持がしたことはない。あの虫の好きと一路通ずるものがありはしないか。

これは天地の食慾とでもいうものではないかしらん、これに較(くら)べると人間の食慾なんて高が知れている。

「しまった」と彼は呟(つぶや)いてみた。

彼は久振りで、自分の嫌な過去の生い立ちを点検してみた。

京都の由緒ある大きな寺のひとり子に生れ幼くして父を失った。母親は内縁の若い後妻で入籍して無かったし、寺には寺で法縁上の紛擾(ふんじょう)があり、寺の後董(ごとう)は思いがけない他所(よそ)の方から来てしまった。親子のものは

ほとんど裸同様で寺を追出される形となった。これみな恬澹（てんたん）な名僧といわれた父親の世務をうるさがる性癖から来た結果だが、母親はどういうものか父を恨まなかった。「なにしろこどものような方だったから罪はない」そしてたった一つの遺言ともいうべき彼が誕生したときいったという父の言葉を伝えた。「この子がもし物ごころがつく時分わしも老齢（とし）じゃから死んどるかも知れん。それで苦労して、なんでこんな苦しい娑婆（しゃば）に頼みもせんのに生み付けたのだと親を恨むかも知れん。だがそのときはいってやりなさい。こっちとて同じことだ、何でも頼みもせんのに親に苦労をかけ

るようなこの苦しい娑婆に生れて出て来なすったのだお互いさまだ、と」この言葉はとても薄情にとれた、しかし薄情だけでは片付けられない妙な響が鼈四郎の心に残された。

　はじめは寺の弟子たちも故師の遺族に恩を返すため順番にめいめいの持寺に引取って世話をした。しかしそれは永く続かなかった。どの寺にも寄食人（かかりゅうど）を息詰らす家族というものがあった。最後に厄介になったのは父の碁敵であった拓本職人の老人の家だった。貧しいが鰥暮（やもめぐら）しなので気は楽だった。母親は老人の家の煮炊き洗濯の面倒を見てやり、彼はちょうど高等小学も

卒業したので老人の元に法帖造りの職人として仕込まれることになった。老人は変り者だった、碁を打ちに出るときは数日も家に帰らないが、それよりも春秋の頃おい小学校の運動会が始り出すと、彼はほとんど毎日家に居なかった。京都の市中や近郊で催されるそれを漁り尋ね見物して来るのだった。「今日の××小学校の遊戯はよく手が揃った」とか、「今日の△△小学校の駈足競争で、今迄にない早い足の子がいた」とか噂して悦んでいた。

その留守の間、彼は糊臭い仕事場で、法帖作りをやっているのだが、墨色に多少の変化こそあれ蟬翅搨と

いったところで、烏金搨（うきんとう）といったところで再び生物の上には戻って来ぬ過去そのものを色にしたような非情な黒に過ぎない。その黒へもって行って寒白い空閑を抜いて浮出す拓本の字劃（じかく）というものは少年の鼈四郎にとってまたあまりに寂しいものであった。「雨降りあとじゃ、川へいて、雑魚（ざこ）なと、取って来なはれ、あんじょ、おいしゅう煮て、食べまひょ」継ものをしていた母親がいった。鼈四郎は笊（ざる）を持って堤を越え川へ下りて行く。

その頃まだ加茂川にも小魚がいた。季節季節によって、鮴（ごり）、川鯊（かわはぜ）、鮠（はや）、雨降り揚句には鮒や鰻も浮出てと

んだ獲ものもあった。こちらの河原には近所の子供の一群がすでに漁(あさ)り騒いでいる。むこうの土手では摘草の一家族が水ぎわまでも摘み下りている。鞍馬(くらま)へ岐(わか)れ路の堤の辺には日傘をさした人影も増えている。境遇に負けて人臆(ひとおく)れのする少年であった鼈四郎は、これ等の人気(ひとけ)を避けて、土手の屈曲の影になる川の枝流れに、芽出し柳の参差(しんし)を盾に、姿を隠すようにして漁った。すみれ草が甘く匂(にお)う。糺(ただす)の森(もり)がぼーっと霞んで見えなくなる。おや自分は泣いてるなと思って眼瞼(まぶた)を閉じてみると、雫(しずく)の玉がブリキ屑(くず)に落ちたかしてぽとんという音がした。器用な彼はそれでも少しの間に一握

りほどの雑魚を漁り得る。持って帰ると母親はそれを巧に煮て、春先の夕暮のうす明りで他人の家の留守を預りながら母子二人だけの夕餉（ゆうげ）をしたためるのであった。

母親は身の上の素性を息子に語るのを好まなかった。ただ彼女は食べ意地だけは張っていて、朝からでも少しのおなまぐさが無ければ飯の箸（はし）は取れなかった。それの言訳のように彼女はこういった。「なんしい、食べ辛棒の土地で気儘放題（きままほうだい）に育てられたもんやて！」

鼈四郎は母親の素性を僅（わずか）に他人から聞き貯めることが出来た。大阪船場（せんば）目ぬきの場所にある旧舗（しにせ）の主人

で鼈四郎の父へ深く帰依（きえ）していた信徒があった。不思議な不幸続きで、店は潰（つぶ）れ娘一人を残して自分も死病にかかった。鼈四郎の父はそれまで不得手ながら金銭上の事に関ってまでいろいろ面倒を見てやったのだが、ついにその甲斐（かい）もなかった。しかし、すべてを過去の罪障のなす業と諦（あきら）めた病主人は、罪障消滅のためにも、一つは永年の恩義に酬（むく）ゆるため、妻を失ってしばらく鰥暮（やもめぐら）しでいた鼈四郎（べつしろう）の父へ、せめて身の周りの世話でもさせたいと、娘を父の寺へ上せて身罷（みまか）ったという。他の事情は語らない母親も「お罪障消滅のため寺方に上った身が、食べ慾ぐらい断ち切れんで、ほんまに済

まんと思うが、やっぱりお罪障の残りがあるかして、こればかりはしようもない」この述懐だけは亦ときどき口に洩(もら)しながら、最小限度のつもりにしろ、食べもの漁(あさ)りはやめなかった。

　少青年の頃おいになって鼈四郎は、諸方の風雅の莚(むしろ)の手伝いに頼まれ出した。市民一般に趣味人をもって任ずるこの古都には、いわゆる琴棋書画の会が多かった。はじめ拓本職人の老人が出入りの骨董商(こっとうしょう)に展観の会があるのを老人に代って手伝いに出たのがきっかけとなり、あちらこちらより頼まれるようになった。才はじけた性質を人臆(ひとおく)しする性質が暈(ぼか)しをか

けている若者は何か人目につくものがあった。薄皮仕立で桜色の皮膚は下膨(しもぶく)れの顔から胸鼈へかけて嫩葉(わかば)のような匂(にお)いと潤いを持っていた。それが拓本老職人の古風な着物や袴(はかま)を仕立て直した衣服を身につけて座を斡旋(あっせん)するさまも趣味人の間には好もしかった。人々は戯れに千の与四郎、——茶祖の利休の幼名をもって彼を呼ぶようになった。利休の少年時が果して彼のように美貌(びぼう)であったか判らないが、少くとも利休が与四郎時代秋の庭を掃き浄(きよ)めたのち、あらためて一握りの紅葉をもって庭上に撒(ま)き散らしたという利休の趣味性の早熟を物語る逸話から聯想(れんそう)して来る与四郎は、彼の

ようなsecond美少年でなければならなかった。与えられたこの戯名を彼も諾い受け寧ろ少からぬ誇りをもって自称するようにさえなった。
洒落れた［＃「洒落れた」は底本では「洒落れた」］お弁当が食べられ、なにがしかずつ心付けの銭さえ貰えるこの手伝いの役は彼を悦ばした。そのお弁当を二つも貰って食べ抹茶も一服よばれたのち、しばらくの休憩をとるため、座敷に張り廻らした紅白だんだらの幔幕を向うへ弾ね潜って出る。そこは庭に沿った椽側であった。陽はさんさんと照り輝いて満庭の青葉若葉から陽の雫が滴っているようである。椽も遺憾なく

照らし暖められている。彼はその椽に大の字なりに寝て満腹の腹を撫でさすりながらうとうとしかける。智恩院聖護院の昼鐘が、まだ鳴り止まない。夏霞棚引きかけ、眼を細めてでもいるような和み方の東山三十六峯。ここの椽に人影はない。しかし別書院の控室の間から演奏場へ通ずる中廊下には人の足音が地車でも続いて通っているよう絶えずどろどろと鳴っている。その控室の方に当っては、もはや、午後の演奏の支度にかかっているらしく、尺八に対して音締めを直している琴や胡弓の音が、音のこぼれもののように聞えて来る。間に混って盲人の鼻詰り声、娘たちの若い笑い声。

若者の鼈四郎は、こういう景致や物音に遠巻きされながら、それに煩わされず、逃れて一人うとうとする束の間を楽しいものに思い做した。腹に満ちた咀嚼物は陽のあたためを受けて滋味は油のように溶け骨、肉を潤し剰り今や身体の全面ににじみ出して来るのを艶やかに感ずる。金目がかかり、値打ちのある肉体になったように感ずる。心の底に押籠められながら焦々した怒ろしい想いはこの豊潤な肉体に対し、いよいよその豊潤を刺激して引立てる内部からの香辛料になったような気がする。その快さ甘くときめかす匂い、芍薬畑が庭のどこかにあるらしい。

古都の空は浅葱色に晴れ渡っている。和み合う睫の間にか、充ち足りた胸の中にか白雲の一浮きが軽く渡って行く。その一浮きは同時にうたた寝の夢の中にも通い、濡れ色の白鳥となって翼に乗せて過ぎる。はつ夏の哀愁。「与四郎さん、こんなとこで寝てなはる。用事あるんやわ、もう起きていなあ、」鼻の尖を摘まれる。美しい年増夫人のやわらかくしなやかな指。

鼈四郎はだんだん家へ帰らなくなった。貧寒な拓本職人の家で、女餓鬼の官女のような母を相手にみじめな暮しをするより、若い女のいる派手で賑かな会席を渡り歩るいてる方がその日その日を面白く糊塗でき

て気持よかった。何か一筋、心のしんになる確(しっか)りした考え。何か一業、人に優れて身の立つような職能を捉(とら)えないでは生きて行くに危いという不安は、殊にあの心の底に伏っている焦々(いらいら)した怒ろしい想いに煽(あお)られると、居ても立ってもいられない悩みの焔(ほのお)となって彼を焼くのであるが、その焦熱を感ずれば感ずるほど、彼はそれをまわりで擦(こす)って掻(か)き落すよう、いよいよ雑多と変化の世界へ紛れ込んで行くのであった。彼はこの間に持って生れた器用さから、趣味の技芸なら大概のものを田舎初段程度にこなす腕を自然に習い覚えた。彼は調法な与四郎となった。どこの師匠の家でも彼を

歓迎した。棋院では初心の客の相手役になってやるし、琴の家では琴師を頼まないでも彼によって絃(げん)の緩みは締められた。生花の家でお嬢さんたちのための花の下慥え、茶の湯の家ではまたお嬢さんや夫人たちのための点茶や懐石のよき相談相手だった。拓本職人は石刷りを法帖(ほうじょう)に仕立てる表具師のようなこともやれば、石刷りを版木に模刻して印刷をする彫版師のような仕事もした。そこから自ずから彼は表具もやれば刀を採って、木彫篆刻(てんこく)の業もした。字は宋拓を見よう見真似(みまね)に書いた。画は彼が最得意とするところで、ひょっとしたら、これ一途(いちず)に身を立てて行こうかとさ

え思うときがあった。

頼めば何でも間に合わして呉(く)れる。こんな調法人をどこで歓迎しないところがあろうか。

彼は紛れるともなく、その日その日の憂さを忘れて渡り歩るいた。母は鼈四郎が勉強のため世間に知識を漁(あさ)っていて今に何か攫(つか)んで来るものと思い込んでるので呑込(のみこ)み顔で放って置いたし、拓本職人の老爺(ろうや)は仕事の手が欠けたのをこぼしこぼし、しかし叱言(こごと)というほどの叱言はいわなかった。

師匠連や有力な弟子たちは彼を取巻のようにして瓢亭・俵やをはじめ市中の名料理へ飲食に連れて行った。

彼は美食に事欠かぬのみならず、天稟（てんぴん）から、料理の秘奥を感取った。

　そうしているうち、ふと鼈四郎に気が付いて来たことがあった。このように諸方で歓迎されながら彼は未だ嘗（かつ）て尊敬というものをされたことがない。大寺に生れ、幼時だけにしろ、総領息子という格に立てられた経験のある、旧舗（しにせ）の娘として母の持てる気位を伝えているらしい彼の持前は頭の高い男なのであった。それがただ調法の与四郎で扱い済されるだけでは口惜しいものがあった。彼の心の底に伏っていつも焦々する怒ろしい想いもどうやら一半はそこから起るらしく思わ

れて来た。どうかして先生と呼ばれてみたい。
人中に揉(も)まれて臆(おく)し心(ごころ)はほとんど除かれている彼に、この衷心から頭を擡(もた)げて来た新しい慾望は、更に積極へと彼に拍車をかけた。彼は高飛車に人をこなし付ける手を覚え、軽蔑(けいべつ)して鼻であしろう手を覚えた。何事にも批判を加えて己れを表示する術(すべ)も覚えた。彼はなりの恰好(かっこう)さえ肩肘(かたひじ)を張ることを心掛けた。彼は手鏡を取出してつくづく自分を見る。そこに映り出る青年があまりに若く美しくして先生と呼ばれるに相応(ふさわ)しい老成した貫禄が無いことを嘆いた。彼はせめて言葉附だけでもいかつく、ませたものにしようと骨を折っ

た。彼の取って付けたような豹変の態度に、弱いものは怯えて敬遠し出した。強いものは反撥して罵った。「なんだ石刷り職人の癖に」そして先生といって畏れるものは料理人だけだった。

「与四郎は変った」「おかしゅうならはった」というのが風雅社会の一般の評であった。彼の心地に宿った露草の花のようないじらしい恋人もあったのだけれども、この噂に脆くも破れて、実を得結ばずに失せた。

若者であって一度この威猛高な誇張の態度に身を任せたものは二度と沈潜して肌質をこまかくするのは余程難しかった。鼈四郎はこの目的外れの評判が自分の

どこの辺から来るものか自分自身に向って知らないとはいい徹せなかった。「学問が無いからだ」この事実は彼に取って最も痛くていまいましい反省だった。そして今更に、悲運な境遇から上の学校へも行けず、秩序立った勉強の課程も踏めなかった自分を憐(あわれ)むのであった。しかしこれを恨みとして、その恨みの根を何処へ持って行くのかとなると、それはまたあまりに多岐に亘(わた)り複雑過ぎて当時の彼には考え切れなかった。嘆くより後(おく)れ走(ば)せでも秘(ひそ)かに学んで追い付くより仕方がない。彼はしきりに書物を読もうと努めた。だが才気とカンと苦労で世間のあらましは、すでに結論だけ

を摘み取ってしまっている彼のような人間にとって、その過程を煩わしく諄(くど)く記述してある書物というものを、どうして迂遠(うえん)で悪丁寧(わるていねい)とより以外のものに思い做(な)されようぞ。彼は頁(ページ)を開くとすぐ眠くなった。それは努めて読んで行くとその索寞(さくばく)さに頭が痛くなって、しきりに喉頭(こうとう)へ味なるものが恋い慕われた。彼は美味な食物を漁(あさ)りに立上ってしまった。

結局、彼は遣(や)り慣れた眼学問、耳学問を長じさせて行くより仕方なかった。そしていま迄、下手(したで)に謙遜(けんそん)に学び取っていた仕方は今度からは、争い食ってかかる紛擾(ふんじょう)の間に相手から捥(も)ぎ取る仕方に方法を替えたに

過ぎなかった。それほどまでにして彼は尊敬なるものを贏ち得たかったのであろうか。然り。彼は彼が食味に於て意識的に人生の息抜きを見出す以前は、実に先生といわれる敬称は彼に取って恋人以上の魅力を持っていたのだった。彼はこの仕方によって数多の旧知己をば失ったが、僅かばかりの変りものの知遇者を得た。世間には啀み合う鑼、捩り合う鐃鈸のような騒々しいものを混えることに於て、却って知音や友情が通じられる支那楽のような交際も無いことはない。鼈四郎が向き嵌って行ったのはそういう苦労胼胝で心の感膜が厚くなっている年長の連中であった。

その頃、京極でモダンな洋食店のメーゾン檜垣の主人もその一人であった。このアメリカ帰りの料理人は、妙に芸術や芸術家の生活に渇仰をもっていて、店の監督の暇には油画を描いていた。寝泊りする自分の室は画室のようにしていた。彼は客の誰彼を摑(つかま)えてはニューヨークの文士村(グリンウィッチビレージ)の話をした。巴里(パリ)の芸術街を真似(まね)ようとするこの街はアメリカ人気質と、憧憬による誇張によって異様で刺激的なものがあった。主人はそれを語るのに使徒のような情熱をもってした。店の施設にもできるだけ応用した。酒神(バッカス)の祭の夕。青蠟燭(あおろうそく)の部屋、新しいものに牽(ひ)かれる青年や、若い芸

術家がこの店に集ったことは見易き道理である。この古都には若い人々の肺には重苦しくて寂寥（せきりょう）だけの空気があった。これを撥（は）ね除（の）け攪（か）き壊すには極端な反撥（はんぱつ）が要った。それ故、一般に東京のモダンより、上方のモダンの方が調子外れで薬が強いとされていた。

　鼈四郎はこの店に入浸るようになった。お互いに基礎知識を欠く弱味を見透すが故に、お互いに吐き合う気焔（きえん）も圧迫感を伴わなかった。飄々（ひょうひょう）とカンのまま雲に上り空に架することができた。立会いに相手を傲慢（ごうまん）で呑（の）んでかかってから軽蔑（けいべつ）の歯を剥出（むきだ）して、意見を噛（か）み合わす無遠慮な談敵を得て、彼等は渾身（こんしん）の力が出し

切れるように思った。その間に狡(ずる)さを働かして耳学問を盗み合い、椀ぎ取る利益も彼等には歓(よろこ)びであった。鼈四郎が東洋趣味の幽玄を高嘯(こうしょう)するに対し、檜垣の主人は西洋趣味の生々(なまなま)しさを誇った。かかるうち知識は交換されて互いの薬籠中(やくろうちゅう)に収められていた。

いつでも意見が一致するのは、芸術至上主義の態度であった。誤って下層階級に生い立たせられたところから自恃(じじ)に相応わしい位置にまで自分を取戻すには**カン**で攀(よ)じ登れる芸術と称するもの以外には彼等は無いと感じた。彼等は鑑識の高さや広さを誇った。この点ではお互いに許し合った。琴棋書画、それから女、芝

居、陶器、食もの、思想に亙(わた)るものまでも、分け距(へだ)てなく味い批評できる彼等をお互いに褒め合った。「僕らは、天才じゃね」「天才じゃねえ」

檜垣の主人は、胸の病持ちであった。彼が独身生活を続けるのも、そこから来るのであったが、情慾は強いかして彼の描く茫漠(ぼうばく)とした油絵にも、雑多に蒐(あつ)められる蒐集品(しゅうしゅうひん)にも何かエロチックの匂(にお)いがあった。瘦(や)せて青黒い隈(くま)の多い長身の肉体は内部から慾求するものを充(み)たし得ない悩みにいつも喘(あえ)いでいた。それに較(くら)べると中背ではあるが異常に強壮な身体を持っている鼈四郎はあらゆる官能慾を貪(むさぼ)るに堪えた。ある種の

嗜(しょく)慾以外は、貪り能(あと)う飽和点を味い締められるが故に却(かえ)って恬淡(てんたん)になれた。

　檜垣の主人は、鼈四郎を連れて、鴨川の夕涼みのゆかから、宮川町辺の赤黒い行灯(あんどん)のかげに至るまで、上品や下品の遊びに連れて歩るいた。そこでも、味い剰(あま)すがゆえにいつも暗鬱(あんうつ)な未練を残している人間と、飽和に達するがゆえに明色の恬淡に冴(さえ)る人間とは極端な対象を倣した。鼈四郎は檜垣の主人の暗鬱な未練に対し、本能の浅間しさと共に本能の深さを感じ、檜垣の主人は鼈四郎の肉体に対して嫉妬(しっと)と驚異を感じた。二人は心秘(こころひそ)かに「あいつ偉い奴じゃ」と互いに舌を巻い

た。

起伏表裏がありながら、また最後に認め合うものを持つ二人の交際は、縄のように絡(から)み合い段々その結ぼれを深めた。正常な教養を持つ世間の知識階級に対し、脅威を感ずるが故に、睥睨(へいげい)しようとする職人上りで頭が高い壮年者と青年は自らの孤独な階級に立籠(たてこも)って脅威し来るものを罵(ののし)る快を貪るには一あって二無き相手だった。彼等は毎日のように会わないでは寂しいようになった。

鼈四郎は檜垣の主人に対しては対蹠的(たいしょてき)に、いつも東洋芸術の幽邃高遠(ゆうすいこうえん)を主張して立向う立場に立つのだが、

反噬（はんぜい）して来る檜垣の主人の西洋芸術なるものを、その範とするところの名品の複写などで味わされる場合に、躊躇（ちゅうちょ）なく感得されるものがあった。檜垣の主人が持ち帰ったのは主にフランス近代の巨匠のものだったが、本能を許し、官能を許し、享受を許し、肉情さえ許したもののあることは東洋の躾（しつけ）と道徳の間から僅にそれ等を垣間（かいま）見させられていたものに取っては驚きの外無かった。恥も外聞も無い露（む）き出しで、きまりが悪いほどだった。「こいつ等は、まるで素人じゃねえ、」鼈四郎は檜垣の主人に向ってはこうも押えた口を利くようなものの、彼の肉体的感覚は発言者を得たように

喝采した。

彼はこの店へ出入りをして食べ増した洋食もうまかったし、主人によっていろいろ話して聴かされた西洋の文化的生活の様式も、便利で新鮮に思われた。

鼈四郎はこれ等の感得と知識をもって、彼の育ちの職場に引返して行った。彼は書画に携る輩に向ってはデッサンを説き、ゴッホとかセザンヌとかの名を口にした。茶の湯生花の行われる巷に向っては、ティパーティの催しを説き、アペリチーフの功徳を説き、コンポジションとかニュアンスとかいう洋名の術語を口にした。

　東洋の諸芸術にも実践上の必需から来る自らなるそれ等にあって、ただ名前と伝統が違っているだけだった。それゆえ、鼈四郎のいうことはこれ等に携る人々にもほぼ察しはつき、心ある者は、なんだ西洋とてそんなものかと嵩(たか)を括(くく)らせはしたが当時モダンの名に於て新味と時代適応性を西洋的なものから採入れようとする一般の風潮は彼の後姿に向っては「葵祭(あおいまつり)の竹の欄干(てすり)で」青く擦(す)れてなはると蔭口を利きながら、この古都の風雅の社会は、彼の前に廻(まわ)っては刺激と思い付を求めねばならなかった。彼の人気は恢復(かいふく)した。三曲の演奏にアンコールを許したり、裸体彫像に生花を配

したり、ずいぶん突飛なことも彼によって示唆されたが、椅子（いす）テーブルの点茶式や、洋食を緩和して懐石の献立中に含めることや、そのときまで、一部の間にしか企てられていなかった方法を一般に流布せしめる椽（えん）の下の力持とはなった。彼は、ところどころで「先生」と呼ばれるようになった。

彼はこの勢を駆って、メーゾン檜垣に集る若い芸術家の仲間に割り込んだ。彼の高飛車と粗雑はさすがに、神経のこまかいインテリ青年たちと肌合いの合わないものがあった。彼は彼等を吹き靡（なび）け、煙に巻いたつもりでも最後に、沈黙の中で拒まれているコツンとした

ものを感じた。それは何とも説明し難いものではあるが彼をして現代の青年の仲間入りしようとする勇気を無雑作に取拉(とりひし)ぐ薄気味悪い力を持っていた。彼は考えざるを得なかった。

　春の宵であった。檜垣の二階に、歓迎会の集りがあった。女流歌人で仏教家の夫人がこの古都のある宗派の女学校へ講演に頼まれて来たのを幸、招いて会食するものであった。画家の良人(おっと)も一しょに来ていた。テーブルスピーチのようなこともあっさり切上がり、内輪で寛(くつろ)いだ会に見えた。しかし鼈四郎(べっしろう)にとってこの夫人に対する気構えは兼々雑誌などで見て、納らぬ

ものがあった。芸術をやるものが宗教に捉われるなんて——、夫人が仏教を提唱することは、自分に幼時から辛い目を見せた寺や、境遇の肩を持つもののようにも感じられた。とうとう彼は雑談の環の中から声を皮肉にして詰った。夫人が童女のままで大きくなったような容貌も苦労なしに見えて、何やら苛め付けたかった。

夫人はちょっと無礼なといった面持をしたが、怒りは嚥み込んでしまって答えた、「いいえ、だから、わたくしは、何も必要のない方にやれとは申上ちゃおりません」鼈四郎は嵩にかかって食ってかかったが、夫人

は「そういう聞き方をなさる方には申上られません」と繰返すばかりであった。世間知らずの少女が意地を張り出したように竈四郎にはとれた。

一時白けた雰囲気の空虚も、すぐまわりから歓談で埋められ、苦り切り腕組をして、不満を示している彼の存在なぞは誰も気付かぬようになった。彼の怒りは縮れた長髪の先にまでも漲（みなぎ）ったかと思われた。その上、彼を拗（こじ）らすためのように、夫人は勧められて「京の四季」かなにかを、みんなの余興の中に加って唄（うた）った。低めて唄ったもののそれは暢（のび）やかで楽しそうだった。良人の画家も列座と一しょに手を叩（たた）いている。

すべてが自分に対する侮蔑（ぶべつ）に感じられてならない鼈四郎は、どんな手段を採ってもこの夫人を圧服し、自分を認めさそうと決心した。彼は、檜垣の主人を語って、この画家夫妻の帰りを待ち捉え、主人の部屋の画室へ、作品を見に寄って呉（く）れるよう懇請した。その部屋には鼈四郎の制作したものも数々置いてあった。

彼は遜（へりくだ）る態度を装い、強いて夫人に向って批評を求めた。そこには額仕立ての書画や篆額（てんがく）があった。夫人はこういうものは好きらしく、親し気に見入って行ったが、良人を顧みていった。「ねえ、パパ、美しくできてるけど、少し味に傾いてやしない？」良人は気

の毒そうにいった。「そうだなあ、味だな」鼈四郎は哄笑(こうしょう)して、去り気ない様子を示したが、始めて人に肺腑(はいふ)を衝(つ)かれた気持がした。良人の画家に「大陸的」と極(き)めをつけられてよいのか悪いのか判(わか)らないが、気に入った批評として笑窪(えくぼ)に入った檜垣の主人まで「そういえば、なるほど、君の芸術は味だな」と相槌(あいづち)を打つ苦々しさ。

鼈四郎は肺腑を衝かれながら、しかしもう一度執拗(しつよう)に夫人へ反撃を密謀した。まだ五六日この古都に滞在して春のゆく方を見巡(みめぐ)って帰るという夫妻を手料理の昼食に招いた。自分の作品を無雑作に味と片付けてし

まうこの夫人が、一体、どのくらいその味なるものに鑑識を持っているのだろう。食もので試してやるのが早手廻（はやてまわ）しだ。どうせ有閑夫人の手に成る家庭料理か、料理屋の形式的な食品以外、真のうまいものは食ってやしまい。もし彼女に鑑識が無いのが判ったなら彼女の自分の作品に対する批評も、惧（おそ）れるに及ばないし、もし鑑識あるものとしたなら、恐らく自分の料理の技倆（ぎりょう）に頭を下げて感心するだろう。さすればこの方で夫人は征服でき、夫人をして自分を認め返さすものである。

幸に、夫妻は招待に応じて来た。

席は加茂川の堤下の知れる家元の茶室を借り受けたものであった。彼は呼び寄せてある指導下の助手の料理人や、給仕の娘たちを指揮して、夫妻の饗宴（きょうえん）にかかった。

彼はさきの夜、檜垣の歓迎会の晩餐（ばんさん）にて、食事のコース中、夫人が何を選み、何を好み食べたか、すっかり見て取っていた。ときどき聞きもした。それは努めてしたのではないが、人の嗜慾（しょく）に対し間諜犬（かんちょうけん）のような嗅覚（きゅうかく）を持つ彼の本能は自ずと働いていた。夫人の食品の好みは専門的に見て、素人なのだか玄人なのだか判らなかった。しかし嗜求する虫の性質はほぼ判った。

鼈四郎は、献立の定慣や和漢洋の種別に関係なく、夫人のこの虫に向って満足さす料理の仕方をした。ああ、そのとき、何という人間に対する哀愛の気持が胸の底から湧き出たことだろう。そこにはもう勝負の気もなかった。征服慾も、もちろんない。

あの大きな童女のような女をして眼を瞠らせ、五感から享け入れる人の世の満足以上のものを彼女をして無邪気に味い得しめたなら料理それ自身の手柄だ。自分なんかの存在はどうだってよい。彼はその気持から、夫人が好きだといった、季節外れの蟹を解したり、一口蕎麦を松江風に捏ねたりして、献立に加えた。ふと

幼いとき、夜泣きして、疳（かん）の虫の好く、宝来豆（ほうらいまめ）というものを欲しがったとき老僧の父がとぼとぼと夜半の町へ出て買って来て呉れたときの気持を想（おも）い出した。鼈四郎は捏ね板へ涙の雫（しずく）を落すまいとして顔を反向けた。所詮（しょせん）、料理というものは労（いたわ）りなのであろうか。そして労りごころを十二分に発揮できる料理の相手は、白痴か、子供なのではあるまいか。

　しかし鼈四郎は夫人が通客であった場合を予想し、もしその眼で見られても恥しからぬよう、坂本の諸子川の諸子魚（もろこ）とか、鞍馬の山椒皮（からかわ）なども、逸早（いちはや）く取寄せて、食品中に備えた。

夫人は、大事そうに、感謝しながら食べ始めた。「この子附け鱠（なます）の美しいこと」「このえび藷（いも）の肌目（きめ）こまかく煮えてますこと」それから唇にから揚の油が浮くようになってからは、ただ「おいしいわ」「おいしいわ」というだけで、専心に喰（た）べ進んで行く。鼈四郎は、再び首尾はいかがと張り詰めていたものが食品の皿が片付けられる毎に、ずしんずしんと減って、気の衰えをさえ感ずるのだった。

夫人も健啖（けんたん）だったが、画家の良人はより健啖だった。みな残りなく食べ終り、煎茶茶椀（せんちゃぢゃわん）を取上げながらいった。「ご馳走（ちそう）さまでした。御主人に申すが、この方が、

よっぽど、あんたの芸術だね」そして夫人の方に向い、それを皮肉でなく、好感を持つ批評として主人に受取らせるよう夫人の註解（ちゅうかい）した相槌（あいづち）を求めるような笑い方をしていた。夫人も微笑したが、声音（こわね）は生真面目（きまじめ）だった。「わたくしも、警句でなく、ほんとにそう思いますわ。立派な芸術ですわ。」

鼈四郎は図星に嵌（は）めたと思うと同時に、ぎくりとなった。彼はいかにふだん幅広い口を利こうと、衷心では料理より、琴棋書画に位があって、先生と呼ばれるに相応（ふさ）わしい高級の芸種であるとする世間月並の常識を無（な）みしようもない。その高きものを前日は味とさ

れ、今日低きものに於て芸術たることを認められた。天分か、教養か、どちらにしろ、もはや自分の生涯の止めを刺された気がした。この上、何をかいおうぞ。

加茂川は、やや水嵩（みずかさ）増して、ささ濁りの流勢は河原の上を八千岐（やちまた）に分れ下へ落ちて行く、蛇籠（じゃかご）に阻まれる花芥（あくた）の渚の緑の色取りは昔に変りはないけれども、魚は少くなったかして、漁（あさ）る子供の姿も見えない。堤の芽出し柳の煙れる梢（こずえ）に春なかばの空は晴れみ曇りみしている。

しばらく沈黙の座に聞澄している淙々（そうそう）とした川音は、座をそのままなつかしい国へ押し移す。鼈四郎（べつしろう）は、こ

の川下の対岸に在って大竹原で家棟は隠れ見えないけれども、まさしくこの世に一人残っている母親のことを思い出す。女餓鬼（めがき）の官女のような母親はそこで食味に執しながら、一人息子が何でもよいたつきの業を得て帰って来るのを待っている。しばらく家へは帰らないが、拓本職人の親方の老人は相変らず、小学校の運動会を漁り歩き遊戯をする児童たちのいたいけな姿に老いの迫るを忘れようと努めているであろうか。

　鼈四郎は、笑いに紛らしながら、幼時、母子二人の夕餉（ゆうげ）の菜のために、この河原で小魚を掬（すく）い帰った話をした。「いままで、ずいぶん、いろいろなうまいものも

食いましたが、いま考えてみると、あのとき母が煮て呉（く）れた雑魚（ざこ）の味ほどうまいと思ったものに食い当りません」それから彼は、きょう、料理中に感じたことも含めて、「すると、味と芸術の違いは労（いたわ）りがあると、無いとの相違でしょうかしら」といった。

　これに就（つ）き夫人は早速に答えず、先ず彼等が外遊中、巴里（パリ）の名料理店フォイヨで得た経験を話した。その料理店の食堂は、扉の合せ目も床の敷ものも物音立てぬよう軟い絨氈（じゅうたん）や毛織物で用意された。色も刺激を抜いてある。天井や卓上の燭光も調節してある。総ては食味に集中すべく心が配られてある。給仕人はイゴと

か男性とかいういかついものは取除かれた品よく晒（さら）された老人たちで、いずれはこの道で身を滅した人間であろう、今は人が快楽することによって自分も快楽するという自他移心の術に達してるように見ゆる。食事は聖餐（せいさん）のような厳かさと、ランデブウのようなしめやかさで執り行われて行く。今やテーブルの前には、はつ夏の澄める空を映すかのような薄浅黄色のスープが置かれてある。いつの間に近寄って来たか給仕の老人は輪切りにした牛骨の載れる皿を銀盤で捧げて立っている。老人は客が食指を動し来る呼吸に坩（つぼ）を合せ、ちょっと目礼して匙（さじ）で骨の中から髄を掬い上げた。汁

の真中へ大切に滑り浮す。それは乙女の娘生(きしょう)のこころを玉に凝らしたかのよう、ぶよぶよ透けるが中にいささか青春の潤(うる)みに澱(よど)んでいる。それは和食の鯛の眼肉の羹(あつもの)にでも当る料理なのであろうか。老人は恭しく一礼して数歩退いて控えた。いかに満足に客がこの天の美漿(びしょう)を啜(す)い取るか、成功を祈るかのよう敬虔(けいけん)に控えている。もちろん料理は精製されてある。サービスは満点である。以下デザートを終えるまでのコースにも、何一つ不足と思えるものもなく、いわゆる善尽し、美尽しで、感嘆の中に食事を終えたことである。

「しかしそれでいて、私どもにはあとで、嘗(な)めこくら

れて、扱い廻(まわ)されたという、後口に少し嫌なものが残されました。」

「面と向って、お褒めするのも気まりが悪うございますから、あんまり申しませんが、そういっちゃ何ですが、今日の御料理には、ちぐはぐのところがございますけれど、まことというものが徹しているような気がいたしました。」

　意表な批評が夫人の口から次々に出て来るものである。料理に向ってまことなぞという言葉を使ったのを鼈四郎は嘗(かつ)て聞いたことはない。そして、まこと、まごころ、こういうものは彼が生れや、生い立ちによる

拗(す)ねた心からその呼名さえ耳にすることに反感を持って来た。自分がもしそれを持ったなら、まるで、変り羽毛の雛鳥(ひなどり)のように、それを持たない世間から寄って蝟(たか)って突き苛(いじ)められてしまうではないか。弱きものよ汝(なんじ)の名こそ、まこと。自分にそういうものを無(な)みし、強くあらんがための芸術、偽りに堪えて慰まんための芸術ではないか。歌人の芸術家だけに旧臭(ふるくさ)く否味(いやみ)なことをいう。道徳かぶれの女学生でもいいそうな芸術批評。歯牙(しが)に懸けるには足りない。

　鼈四郎はこう思って来ると夫妻の権威は眼中に無くなって、肩肘(かたひじ)がむくむくと平常通り聳立(そびえた)って来るのを

覚えた。「はははは、まこと料理ですかな」

車が迎えに来て、夫妻は暇を告げた。鼈四郎はこれからどちらへと訊くと、夫妻は壬生寺へお詣りして、壬生狂言の見物にと答えた。鼈四郎は揶揄して「善男善女の慰安には持って来いですね」というと、ちょっと眉を顰めた夫人は「あれをあなたは、そうおとりになりますの、私たちは、あの狂言のでんがんでんがんという単調な鳴物を地獄の音楽でも聞きに行くように思って参りますのよ」というと、良人の画家も、実は鼈四郎の語気に気が付いていて癪に触ったらしく「君おれたちは、善男善女でもこれで地獄は一遍たっぷり

通って来た人間たちだよ。だが極楽もあまり永く場塞（ばふさ）ぎしては済まないと思って、また地獄を見付けに歩るいているところだ。そう甘くは見なさるなよ」と窘（たしな）めた。夫人はその良人の肘をひいて「こんな美しい青年を咎（とが）め立するもんじゃありませんわ。人間の芸術品が壊れますわ」自分のいったことを興がるのか、わっわと笑って車の中へ駈（か）け込んだ。

鼈四郎はその後一度もこの夫妻に会わないが、彼の生涯に取ってこの春の二回の面会は通り魔のようなものだった。折角設計して来た自分らしい楼閣を不逞（ふてい）の風が浚（さら）い取った感じが深い芸術なるものを通して何か

あるとは感づかせられた。しかし今更、宗教などという黴臭いと思われるものに関る気はないし、そうかといって、夫人のいったまこととかまごころとかいうものを突き詰めて行くのは、安道学らしくて身慄いが出るほど、怖気が振えた。結局、安心立命するものを捉えさえしたらいいのだろう。死の外にそれがあるか。必ず来て総てが帳消しされる死、この退っ引ならないものへ落付きどころを置き、その上での生きてるうちが花という気持で、せいぜい好きなことに殉じて行ったなら、そこに出て来る表現に味とか芸術とかの岐れの議論は立つまい。「いざとなれば死にさえすればい

いのだ」鼈四郎は幼い時分から辛い場合、不如意な場合には逃れずさまよい込み、片息をついたこの無可有の世界の観念を、青年の頭脳で確と積極的に思想に纏め上げたつもりでいる。これを裏書するように檜垣の主人の死が目前に見本を示した。

　檜垣の主人は一年ほどまえから左のうしろ頸に癌が出はじめた。始めは痛みもなかった。ちょっと悪性のものだから切らん方がよいという医師の意見と処法に従ってレントゲンなどかけていたが。癌は一時小さくなって、また前より脹れを増した。とうとう痛みが来るようになった。医者も隠し切れなくなったか肺臓癌

がここに吹出したものだと宣告した。これを聞いても檜垣の主人は驚かなかった。「したいと思ったことでできなかったこともあるが、まあ人に較(くら)べたらずいぶんした方だろう」「この辺で節季の勘定を済すかな」笑いながらそういった。それから身の上の精算に取りかかった。店を人に譲り総ての貸借関係を果すと、少しばかり余裕の金が残った。「僕は賑(にぎや)かなところで死にたい」彼はそれをもって京極の裏店に引越した。美しい看護婦と、気に入りのモデルの娘を定まった死期までの間の常傭(じょうやと)いにして、そこで彼は彼の自らいう「天才の死」の営みにかかった。

売り惜んだ彼が最後に気に入りの蒐集品（しゅうしゅうひん）で部屋の中を飾った。それでも狭い部屋の中は一ぱいで猶太人（ユダヤじん）の古物商の小店ほどはあった。

彼はその部屋の中に彼が用いつけの天蓋附（てんがいつき）のベッドを据えた。もちろん贋（にせ）ものであろうが、彼はこれを南北戦争時分にアメリカへ流浪した西班牙（スペイン）王属出の吟遊詩人が用いたものだといっていた。柱にラテン文字で詩は彫付けてあるにはあった。彼はそこで起上って画を描き続けた。

癌（がん）はときどき激しく痛み出した。服用の鎮痛剤ぐらいでは利かなかった。彼は医者に強請（せが）んで麻痺薬（まひやく）を注

射して貰う。身体が弱るからとてなかなか注して呉れない。全身、蒼黒くなりその上、痩さらばう骨の窪みの皮膚にはうす紫の隈まで、漂い出した中年過ぎの男は脹れ嵩張ったうしろ頸の瘤に背を跼められ侏儒にして餓鬼のようである。夏の最中のこととて彼は裸でいるので、その見苦しさは覆うところなく人目を寒気立した。痛みが襲って来ると彼はその姿でベッドの上で踠き苦しむ。全身に水を浴びたよう脂汗をにじみ出し長身の細い肢体を捩らし擦り合せ、甲斐ない痛みを扱き取ろうとするさまは、蛇が難産をしているところかなぞのように想像される。いくら認め合った親友でも、

鼈四郎は友の苦しみを看護ることは好まなかった。

苦しみなぞというものは自分一人のものだけでさえ手に剰っている。殊に不快ということは人間の感覚に染み付き易いものだ。芸術家には毒だ。避けられるだけ避けたい。そこで鼈四郎は檜垣の病主人に苦悶が始まる、と、すーっと病居を抜け出て、茶を飲んで来るか、喋って来るのであった。だが病友は許さなくなった。「なんだ意気地のない。しっかり見とれ、かく成り果てるとまた痛快なもんじゃから――」息を喘がせながらいった。

鼈四郎は、手を痛いほど握り締め、自分も全身に脂

汗をにじみ出させて、見ることに堪えていた。死は惧ろしくはないが、死へ行くまでの過程に嫌なものがあるという考えがちらりと念頭を掠めて過ぎた。だがそういうことは病主人が苦悶を深め行くにつれ却って消えて行った。あまりの惨ましさに痺れてぽかんとなってしまった鼈四郎の脳底に違ったものが映り出した。見よ、そこに蠢くものは、もはやそれは生物ではない。埃及のカタコンブから掘出した死蠟であるのか、西蔵の洞窟から運び出した乾酪の屍体であるのか、永くいのちの息吹きを絶った一つの物質である。しかも何やら律動しているところは、現代に判らない巧妙繊細な

機械仕掛けが仕込まれた古代人形のようでもある。蒼黒く燻（くす）んだ古代人形はほぼ一定の律動をもって動く、くねくね、きゅーっぎゅっと踠いて、もくんと伸び上る。頽（くずお）れて、そして絶息するようにふーむと唵く。同じ事が何度も繰返される。モデル娘は惨ましさに泣きかけた顔をおかしさで歪（ゆが）み返させられ、妙な顔になって袖（そで）から半分覗（のぞ）かしている。看護婦は少し怒りを帯びた深刻な顔をして団扇（うちわ）で煽（あお）いでいる。

　鼈四郎は気付いた。病友はこの苦しみの絶頂にあって遊ぼうとしているのだ。彼は痛みに対抗しようとする肉体の自らなる踠きに、必死とリズムを与えて踊り

に慥えているのだ。そうすることが少しでも病痛の紛らかしになるのか、それとも友だちの、ふだんいう「絶倫の芸術」を自分に見せようため骨を折っているのか。病友はまた踊る、くねくね、ぎゅーっ、きゅ、もくんもくんそして頽れ絶息するようにふーむと唵く。それは回教徒の祈禱（きとう）の姿に擬しつつ実は、聞えて来る活動館の安価な楽隊の音に合わせているのだった。

鼈四郎が、なお愕（おどろ）いたことは、病友は、そうしながら向う側の壁に姿見鏡を立てかけさせ、自分の悲惨な踊りを、自ら映しみて効果を味っていることだった。映像を引立たせる背景のため、鏡の縁の中に自分の姿

と共に映し入るよう、青い壁絨と壺に夏花までベッドの傍に用意してあるのだった。鼈四郎に何か常識的な怒りが燃えた。「病人に何だって、こんなばかなことをさしとくのだ」鼈四郎はモデルの娘に当った。モデル娘は「だって、こちらが仰しゃるんですもの」と不服そうにいった。病友はつまらぬ咎め立をするなと窘める眼付をした。

　三度に一度の願いが叶って医者に注射をして貰ったときには病友は上機嫌で、へらりへらり笑った。食慾を催して鼈四郎に何を作れかにを作れと命じた。葱とチーズを壺焼にしたスープ・ア・ロニオンとか、

牛舌（オックス・タング）のハヤシライスだとか、莢隠元（アリコベル）のベリグレット・ソースのサラダとか、彼がふだん好んだものを註文（ちゅうもん）したので鼈四郎は慥え易かった。しかし家鴨（あひる）の血を絞ってその血で家鴨の肉を煮る料理とか、大鰻をぶつ切りにして酢入りのゼリーで寄る料理とかは鼈四郎は始めてで、ベッドの上から病友に差図されながらもなかなか加減は難しかった。家鴨の血をアルコールランプにかけた料理盤で搔（か）き混ぜてみると上品なしる粉ほどの濃さや粘りとなった。これを塩胡椒（しおこしょう）し、家鴨の肉の截片を入れてちょっと煮込んで食べるのだが、鼈四郎は味見をしてみるのに血生臭（ちなまぐさ）いことはなかった。

巴里(パリ)の有名な鴨料理店の家の芸の一つでまず凝った贅沢(ぜいたく)料理に属するものだと病友はいった。鰻の寄せものは伊太利(イタリア)移民の貧民街などで辻売(つじうり)している食品で、下層階級の食べものだといった。うまいものではなかった。病友はそれらの食品にまつわる思い出でも楽しむのか、慥えてやってもろくに食べもしないで、しかし次々にふらふらと思い出しては註文した。鴨のない時期に、鴨に似た若い家鴨を探したり、夏長(た)けて莢(さや)は硬ばってしまった中からしなやかな莢隠元(さやいんげん)を求めたり竈四郎は、走り廻(まわ)った。病友はまたずっと溯(さかのぼ)った幼時の思い出を懐しもうとするのか、フライパンで文

字焼を焼かせたり、炮烙（ほうろく）で焼芋を作らせたりした。

これ等を鼈四郎は、病友が一期の名残りと思えばこそ奔走しても望みを叶えさしてやるのだが、病友はこれ等を娯（たの）しみ終りまだ薬の気が切れずに上機嫌の続く場合に、鼈四郎を遊び相手に労（わずらわ）すのにはさすがの鼈四郎も、病友が憎くなった。病友は鼈四郎にうしろ頸に脹れ上って今は毬（まり）が覗（のぞ）いているほどになっている癌の瘤へ、油絵の具で人の顔を描けというのである。「誰か友だちを呼んで見せて、人面疽（じんめんそ）が出来たと巫山戯（ふざけ）てやろう」鼈四郎が辞んでも彼は訊入（ききい）れなかった。鼈四郎は渋々筆を執った。繃帯（ほうたい）を除くとレントゲンの光線

焦(や)けと塗り薬とで鰐皮色(わにがわいろ)になっている堆(うずたか)いものの中には執拗(しつよう)な反人間の意志の固りが秘められているように思われる。内側からしんの繁凝(しこり)が円味を支え保ち、そしてその上に程よい張度の肉と皮膚が覆っている腫物(はれもの)は、鋭いメスをぐさと刺し立てたい衝動と、その意地張った凝り固りには、ひょぐって揶揄(やゆ)してやるより外に術はないという感じを与えられる。腫物の皮膚に油絵の具のつきはよかった。彼は絵の具を介して筆尖(ひっせん)でこの怪物の面を押し擦るタッチのうちに病友がいかにこの腫物を憎んだか。そして憎み剰った末が、悪戯(いたずら)ごころに気持をはぐらかさねばならないわけが判

るような気がした。「思い切り、人間の、苦痛というものをばかにした顔に描いてやれ、腫物とは見えない人の顔に」彼は、人の顔らしく地塗りをし、隈取（くまど）りをし鼻、口、眼と描き入れかけた。病友はここまで歯を食い縛って我慢していたが、「た　た　た　た　た　た」といって身体をすさらせた。彼はいった。「さすがに堪（たま）らん、もう、ええ、あとはたれか痛みの無くなった死骸（しがい）になってから描き足して呉（く）れ」それゆえ、腫物の上に描いた人の顔は瞳（ひとみ）は一方しか入れられずに、しかも、ずっている。鼈四郎は病友がいった通り、彼が死んでからも顔を描き上げようとはしなかった。隻眼

を眇（すがめ）にして睨（にら）みながら哄笑（こうしょう）している模造人面疽（もぞうじんめんそ）の顔は、ずった偶然によって却（かえ）って意味を深めたように思えた。人生の不如意を、諸行無常を眺めやる人間の顔として、なんで、この上、一点の描き足しを附け加える必要があろう。

鼈四郎は病友の屍体（したい）の肩尖（かたさき）に大きく覗いている未完成の顔をつくづく見瞠（みい）り「よし」と独りいって、屍体を棺に納め、共に焼いてしまったことであった。

病友に痛みの去る暇なく、注射は続いた。流動物しか摂（と）れなくなって、彼はベッドに横わり胸を喘ぐだけとなった。鼈四郎は、それが夜店の膃肭獣（おっとせい）売りの看板

である膃肭獣の乾物に似ているので、人間も変れば変るものだと思うだけとなった。病友は口から入れるものは絶ち、苦痛も無くなってしまったらしい。医者は臨終は近いと告げた。看護婦もモデルの娘も涙の眼をしょぼしょぼさせながら帰り支度の始末を始め出した。病友は朦々(もうもう)として眠っているのか覚めているのか判らない場合が多い。けれども咽頭奥(のどおく)で呟(つぶや)くような声がしているので鼈四郎(べっしろう)が耳を近付けてみると、唄(うた)を唄っているのだった。病友がこういう唄を唄ったことを一度も鼈四郎は聞いたことはなかった。覚束(おぼつか)ない節を強いて聞分けてみると、それは子守唄だった。「ねんこ

ろりよ、ねんころりねんころり」

　鼈四郎の顔が自分に近付いたのを知って病友は努めて笑った。そして喘（あえ）ぎ喘ぎいう文句の意味を理解に綴（つづ）ってみるとこういうのだった。「どこを見渡してもさっぱりしてしまって、まるで、何にもない。いくら探しても遺身（かたみ）の品におまえにやるものが見付からないので困った。そうそう伯母さんが東京に一人いる。これは無くならないでまだある。遠方にうすくぼんやり見える。これをおまえにやる。こりゃいいもんだ。やるからおまえの伯母さんにしなさい。」

　病友は死んだ。店の旧取引先か遊び仲間の知友以外

に京都には身寄りらしいものは一人も無かった。東京の伯母なるものに問合すと、年老いてることでもあり葬儀万端然(しか)るべくという返事なので竈四郎は、主に立って取仕切り野辺の煙りにしたことであった。

その遺骨を携えて竈四郎は東京に出て来た。東京生れの檜垣の主人はもはや無縁同様にはなっているようなものの菩提寺(ぼだいじ)と墓地は赤坂青山辺に在った。戸主のことではあり、ともかく、骨は菩提寺の墓に埋めて欲しいという伯母の希望から運んで来たのであったが、

鼈四郎は東京のその伯母の下町の家に落付き、埋葬も終えて、序（ついで）にこの巨都も見物して京都に帰ろうとする一ヶ月あまりの間に、鼈四郎はもう伯母の擒（とりこ）となっていた。

この伯母は、女学校の割烹教師（かっぽうきょうし）上りで、草創時代の女学校とてその他家政に属する課目は何くれとなく教えていた。時代後れとなって学校を退かされてもこれが却（かえ）って身過ぎの便りとなり、下町の娘たちを引受けて嫁入り前の躾（しつけ）をする私塾を開いていた。伯母も身うちには薄倖（はっこう）の女で、良人（おっと）には早く死に訣（わか）れ、四人ほどの子供もだんだん欠けて行き、末の子の婚期に入っ

たほどの娘が一人残って、塾の雑事を賄(まかな)っていた。貧血性のおとなしい女で、伯母に叱(しか)られては使い廻(まわ)され、塾の生徒の娘たちからは姉さんと呼ばれながら少しばかにされている気味があった。何かいわれると、おどおどしているような娘だった。

伯母はむかし幼年で孤児となった甥の檜垣の主人を引取り少年の頃まで、自分の子供の中に加えて育てたのであったが、以後檜垣の主人は家を飛出し、外国までも浮浪(さまよ)い歩るいて音信不通であったこの甥に対し、何の愛憎も消え失(う)せているといった。しかし、このまま捨置くことなら檜垣の家は後嗣(あと)絶えることになると

いった。
　甥の檜垣の家が宗家で、伯母はその家より出て分家へ嫁に行ったものである。伯母はいった、自分の家は廃家しても関（かま）わぬ、しかし檜垣の宗家だけは名目だけでも取留めたい。そこで相談である。もし「それほど嫌でなかったら――」自分の娘を娶（めと）って呉（く）れて、できた子供の一人を檜垣の家に与え、家の名跡だけで復興さして貰い度（た）い。さすれば自分に取っては宗家への孝行となるし、あなたにしても親友への厚い志となる。「第一、貰って頂き度い娘は、檜垣に取ってたった一人の従兄弟女（いとこめ）である。これも何かのご縁ではあるまい

か。」
　始めこの話を伯母から切出されたときに鼈四郎は一笑に附した。あの颺々（ようよう）として芸術三昧（ざんまい）に飛揚して没（う）せた親友の、音楽が済み去ったあとで余情だけは残るもののその木地（きじ）は実は空間であると同じような妙味のある片付き方で終った。その病友の生涯と死に対し、伯母の提言はあまりに月並な世俗の義理である。どう矧（は）ぎ合わしても病友の生涯の継ぎ伸ばしにはならない。伯母のいう末の娘とて自分に取り何の魅力もない。
「そんなことをいったって――」鼈四郎はひょんな表情をして片手で頭を抱えるだけてあったが、伯母の説

得は間がな隙がな弛まなかった。「あなたも東京で身を立てなさい。東京はいいところですよ」といって、鼈四郎の才能を鑑検し、急ぎ蛍雪館はじめ三四の有力な家にも小使い取りの職仕を紹介してこの方面でも鼈四郎を引留める錨を結びつけた。伯母は蛍雪館が下町に在った時分姉娘のお千代を塾で引受けて仕込んだ関係から蛍雪とは昵懇の間柄であった。

　何という無抵抗無性格な女であろうか。鼈四郎は伯母の末の娘で檜垣の主人の従姉妹に当るこの逸子という女の、その意味での非凡さにもやがて搦め捕られてしまった。鼈四郎のような生活の些末の事にまで、タ

イラントの棘（とげ）が突出ている人間に取り、性抜きの薄綿のような女は却（かえ）って引懸り包（くる）まれ易い危険があったのだった。鼈四郎の世間に対する不如意の気持から来る八つ当りは、横暴ないい付けとなって手近かのものへ落ち下る。彼女はいつもびっくりした愁い顔で「はいはい」といい、中腰（ちゅうごし）駈足（かけあし）でその用を足そうと努める。自分の卑屈な役割は一度も顧ることなしに、また次の申付けをおどおどしながら待受けているさまは、鼈四郎には自分が電気を響かせるようで軽蔑（けいべつ）しながら気持がよいようになった。世を詛（のろ）い剰（あま）って、意地悪く吐出す罵倒や嘲笑（ちょうしょう）の鋒尖（ほこさき）を彼女は全身に刺し込まれても、

ただ情無く我慢するだけ、苦鳴の声さえ聞取られるのに憶している。肌目(きめ)がこまかいだけが取得の、無味で冷たく弱々しい哀愁、焦(じ)れもできない馬鹿正直さ加減。

一方、伯母は薄笑いしながら説得の手を緩めない。鼈四郎としては「何の」と思いながら、逸子が必要な身の廻りのものとなった。結婚同様の関係を結んでしまった。ずるずるべったりに伯母の望む如く、鼈四郎は、東京居住の人間となり逸子を妻と呼ぶことにしてしまった。そして檜垣の主人が死ぬ前に譫言(うわごと)にいった「伯母をおまえにやる。おまえの伯母にしろ」といった言葉が筋書通りになった不思議さを、ときどき想(おも)い

見るのであった。

京都に一人残っている生みの母親、青年近くまで養ってくれた拓本の老職人のことも心にかからないことはないけれども、鼈四郎の現在のような境遇には、彼等との関係はもとからの因縁が深いだけに、それを考えに上すことは苦しかった。この撥ぜ開けた巨都の中で一旗揚げる慾望に燃え盛って来た鼈四郎に取り、親友でこそあれ、他人の伯母さんを伯母さんと呼ぶぐらいの親身さが抜き差しができて責任が軽かった。責任感が軽くて世話をして呉れる老女は便利だった。しかし生きてるうちは好みに殉じ死に向ってはこれを遊

戯視して、一切を即興詩のように過したかに見えた檜垣の主人が譫言の無意識でただ一筋、世俗的な糸をこの世に曳（ひ）き遺（のこ）し、それを友だちの自分に絡（から）みつけて行って、しかもその糸が案外、生あたたかく意味あり気なのを考えるのは嫌だった。

伯母が世話をして呉れた下町の三四の有力な家の中で、鼈四郎は蛍雪館の主人に一ばん深く取入ってしまった。

蛍雪館の主人は、江戸っ子漢学者で、少壮の頃は、当時の新思想家に違いなかった。講演や文章でかなり鳴（なら）した。油布の支那服なぞ着て、大陸政策の会合なぞ

へも出た。彼の説は時代遅れとなり妻の変死も原因して彼は公的のものと一切関係を断ち、売れそうな漢字辞典や、受験本を書いて独力で出版販売した。当ったその金で彼は家作や地所を買入れ、その他にも貨殖の道を講じた。彼は小富豪になった。

彼は鰥（やもめ）で暮していた。姉のお千代に塾をひかしてから主婦の役をさせ、妹のお絹は寵愛物（ちょうあいぶつ）にしていた。蛍雪の性癖も手伝い、この学商の家庭には檜垣の伯母のようなもの以外出入りの人物は極めて少かった。新来とはいえ蛍雪に取って鼈四郎（べっしろう）は手に負えない清新な怪物であった。琴棋書画等趣味の事にかけては大概の

ことの話相手になれると同時に、その話振りは思わず熱意をもって蛍雪を乗り出させるほど、話の局所局所に、逆説的な弾機を仕掛けて、相手の気分にバウンドをつけた。中でも食味については鼈四郎は、実際に食品を作って彼の造詣(ぞうけい)を証拠立てた。偏屈人に対しては妙に心理洞察のカンのある彼は、食道楽であるこの中老紳士の舌を、その方面から暗(そら)んじてしまって、嗜慾(しょく)をピアノの鍵板(けんばん)のように操った。鰥暮しで暇のある蛍雪は身体の中で脂肪が燃えでもするようにフウフウ息を吐きながら、一日中炎天の下に旅行用のヘルメットを冠(かぶ)って植木鉢の植木を剪(き)り嘖(さいな)んだり、飼ものに凝っ

たり、猟奇的な蒐集物（しゅうしゅうぶつ）に浮身を俏（やつ）したりした。時には自分になまじい物質的な利得ばかりを与えながら昔日の尊敬を忘れ去り、学商呼ばわりする世情を、気狂いのようになって悲憤慷慨（ひふんこうがい）することもある。そんな不平の反動も混って蛍雪の喰（た）べものへの執し方が激しくなった。

　蛍雪が姉娘のお千代を世帯染（しょたいじ）みた主婦役にいためつけながら、妹のお絹に当世の服装（みなり）の贅（ぜい）を尽させ、芝の高台のフランスカトリックの女学校へ通わせてほくほくしているのも、性質からしてお絹の方が気に入ってるには違いないが、やはり、物事を極端に偏らせる彼

の凝り性の性癖から来るものらしかった。彼は鼈四郎が来るまえから鼈（すっぽん）の料理に凝り出していたのだが、鼈鍋（すっぽんなべ）はどうやらできたが、鼈蒸焼（むしやき）は遣（や）り損じてばかりいるほどの手並だった。鼈四郎は白木綿で包んだ鼈を生埋めにする熱灰を拵（こしら）える薪の選み方、熱灰の加減、蒸し焼き上る時間など、慣れた調子で苦もなくしてみせ、蛍雪は出来上ったものを毟（むし）って生醤油（きじょうゆ）で食べると近来にない美味であった。それまで鼈四郎は京都で呼び付けられていた与四郎の名を通していたのだったが、以後、蛍雪は与四郎を相手させることに凝り出し、手前勝手に鼈四郎と呼名をつけてしまった。娘の姉妹も

それについて呼び慣れてしまう。独占慾の強い蛍雪は、鼈四郎夫妻に住宅を与え僅（わずか）に食べられるだけの扶養を与えて他家への職仕を断らせた。

鼈四郎は、蛍雪館へ足を踏み入れ妹娘のお絹を一目見たときから「おやっ」と思った。これくらい自分とは縁の遠い世界に住む娘で、そしてまたこれくらい自分の好みに合う娘はなかった。いつも夢見ているあどけない恰好（かこう）をしていて、そしてかすかに皮肉な苦味を帯びている。青ものの走りが純粋無垢（むく）でありながら、何か捥（も）ぎ取られた将来の生い立ちを不可解の中に蔵している一つの権威、それにも似た感じがあった。

お絹は人出入稀(ま)れな家庭に入って来た青年の鼈四郎を珍しがりもせず、ときどきは傍にいても、忘れたかのように、うち捨てて置いたまま、ひとりで夢見たり、遊んだりした。母無くして権高な父の手だけで育ったためか、そのとき中性型で高貴性のある寂しさがにじんだ。鼈四郎が美貌(びぼう)であることは最初から頓着(とんちゃく)しないようだった。姉娘のお千代の方が顔を赧(あか)めたり戸惑う様子を見せた。

鼈四郎は絹に向うと、われならなくに一層肩肘(かたひじ)を張り、高飛車に出るのをどうしようもない。その心底を見透すもののようにまたそうでもないように、ふだん

伏眼勝ちの煙れる瞳（ひとみ）をゆっくり上げて、この娘はまともに青年を瞠入（みい）るのであった。すると鼈四郎は段違いという感じがして身の卑しさに心が竦（すく）んだ。

だが、鼈四郎は、蛍雪の相手をする傍ら、姉妹娘に料理法を教えることをいい付かり、お絹の手を取るようにして、仕方を授ける間柄になって来ると、鼈四郎は心易いものを覚えた。この娘も料理の業（わざ）は普通の娘同様、あどけなく手緩かった。それは着物の綻（ほころ）びから不用意に現している白い肌のように愛らしくもあった。彼は娘の間の抜けたところを悠々と味いながら叱（しか）りもし罵（ののし）りもできた。お絹はこういうときは負けて

いず、必ず遣(や)り返したが、この青年の持つ秀でた技倆(ぎりよう)には、何か関心を持って来たようだった。鼈四郎は調子づき、自己吹聴がてら彼の芸術論など喋(しゃべ)った。遠慮は除れた。しかしただそれだけのものであった。この娘こそ虫が好く虫が好くと思いながら、鼈四郎は、逸子との変哲もない家庭生活に思わず月日を過し子供も生れてしまった。もう一人檜垣の家の後嗣(あとつぎ)に貰える筈(はず)の子供が生れるのを伯母さんは首を長くして待受けている。

今宵（こよい）、霧の夜の、闇（やみ）の深さ、粘りこさにそそられて鼈四郎は珍らしく、自分の過ぎ来た生涯を味い返してみた。死をもって万事清算がつく絶対のものと思い定め、それを落付きどころとして、その無からこの生を顧り、須臾（しゅゆ）の生なにほどの事やあると軽く思い做（な）されるこころから、また死を眺めやってこれも軽いものに思い取る。幼児の体験から出発して、今日までに思想にまで纏（まと）め上げたつもりの考え。

しかる上は生きてるうちが花と定めて、できることなら仕度（した）い三昧（ざんまい）を続けて暮そうという考えは、だんだんあやしくなって来た。何一つ自分の思うこととてで

きたものはない。たった一つこれだけは漁(あさ)り続けて来たつもりの食味すら、それに纏(まつわ)る世俗の諸事情の方が多くて自分を意外の方向へ押流し、使い廻(まわ)す挺(てこ)にでもなっているような気がする。

霰(あられ)が降る。深くも、粘り濃い闇の中に。いくら降っても降り白められない闇を、いつかは降り白められでもするかと、しきりに降り続けている。

夜も更けたかして、あたりの家の物音は静り返り、表通りを通る電車の轟(とどろ)きだけがときどき響く。隣の茶の間で寝付いたらしい妻は、ときどき泣こうとする子供を「おとうさんがおとうさんが」と囁(ささや)いて乳房で

押て黙らせ、またかすかな寝息を立てている。鼈四郎が家にいる間は、気難しい父を憚（はばか）り、母のいうこの声を聞くと共に、子供は泣きかかっても幼ごころに歯を食い縛り、我慢をする癖を鼈四郎は今宵はじめて憐（あわ）れに思った。没（な）くなった父の老僧は、もし子供が不如意を託（かこ）って「なぜ、こんな世の中に自分を生んだか」と、父を恨むような場合があったら、「こっちが頼みもしないのに、なぜ生れた。お互いさまだ。」といって聞かせと、母にいい置いたそうだが、今宵考えてみれば、亡父は考え抜いた末の言葉のようにも思える。子供にも彼自身に知られぬ意志がある。

　お互いさまでわけが判らぬ中に、父は自分を遺(のこ)し、自分はこの子を遺している。父のそのいい置きを伝えた母は、また、その実家の罪滅しのためとて、若い身空ですべての慾情を断ったつもりでも、食意地だけは断たれず、嘆きつつもそれを自分の慾情の上に伝えている。少年の頃、自分がうまいものをよそで饗(よ)ばれて帰って話すとき、母は根掘り葉掘り詳しく聞き返し、まるで自分が食べでもしたような満足さで顔を生々とさしたではないか。そして自分が死水を取ってやった唯一の親友の檜垣の主人は、結局その姪を自分に妻(め)あわして、後嗣の胤(たね)を取ろうとする仕掛を、死の断末魔

の無意識中にあっさり自分に伏せている。こう思って来ると、世の中に自分一代で片付くものとては一つも無い。自分だけで成せたと思うものは一つもない。みな亡父のいうお互いさまで、続かり続け合っている。はじめて気の付くのは、いつぞや京都の春で、二回会ったきりの画家と歌人夫妻のいった言葉だ。「おれたちは、極楽の場塞（ばふさ）げを永くするのも済まないと思って、地獄の席を探しているところだ」と。そうしてみると、せんせいたちもこの断ち切れないお互いのものには、ぞっこん苦労した連中かな。夫人のいった、まこと、まごころというものも、安道徳のそれではなくて一癖

も二癖もある底の深い流れにあるらしいものを指すのか。それは何ぞ。

夜はしんしんと更けて、いよいよ深みまさり、粘り濃く潤う闇（やみ）。無限の食慾をもって降る霰（あられ）を、下から食い貪（むさぼ）り食い貪り飽くことを知らない。ひょっと見方を変えれば、永遠に、霰を上から吐きに吐くとも見える。ひっきよう食いつつ吐きつつ食いつつ飽き足るということを知らない闇。こんな逞（たくま）しい食慾を鼈四郎（べつしろう）はまだ嘗（かつ）て知らなかった。死を食い生を吐くものまたかくの如きか。

闇に身を任せ、われを忘れて見詰めていると闇に

艶（つやや）かなものがあって、その潤いと共に、心をしきりに弄（なぶ）られるような気がする。お絹？　はてな。これもまた何かの仕掛かな。

大根のチリ鍋は、とっくに煮詰って、鍋底（なべぞこ）は潮干の潟に芥（あくた）が残っているようである。台所へ出てみると、酒屋の小僧が届けたと見え、ビールが数本届いていた。それを座敷へ運んで来て、鼈四郎は酒に弱い癖に今夜一夜、霰の夜の闇を眺めて飲み明そうと決心した。この逞しい闇に交際（つきあ）って行くには、しかし、「とても、大根なぞ食っちゃやおられん。」

彼は、穏に隣室へ声をかけた。

「逸子、済まないが、仲通りの伊豆庄を起して、鮟鱇（あんこう）の肝か、もし皮剝（かわはぎ）の肝が取ってあるようだったら、その肝を貰って来て呉（く）れ、先生が欲しいといえばきっと、呉れるから――」

　珍しく丁寧に頼んだ。はいはいと寝惚（ねぼ）け声で答えて、あたふた逸子が出て行く足音を聞きながら、鼈四郎は焜炉（こんろ）に炭を継ぎ足した。傾ける顔に五十燭（しょく）の球の光が当るとき、鼈四郎の瞼（まぶた）には今まで見たことの無い露が一粒光った。

底本：「昭和文学全集　第5巻」小学館
１９８６（昭和61）年12月1日初版第1刷発行
底本の親本：「岡本かの子全集　第五巻」冬樹社
１９７４（昭和49）年12月10日初版第1刷発行
※疑問箇所の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。
入力：阿部良子
校正：松永正敏
２００４年1月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。